

令和4年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 講演録

酒天童子の物語と千葉氏

～逸翁本『大江山絵詞』をめぐって～

令和5年3月

千葉市・千葉大学



令和4年度 千葉市・千葉大学公開市民講座

逸翁本『大江山絵詞』をめぐって

酒天童子の物語と 千葉氏

2022 | 12 | 10 土

13:00 ▶ 16:15

千葉大学西千葉キャンパス
けやき会館大ホール

申込期間

2022年11月1日(火)から11月22日(火)まで

参加無料

募集人数:150名



参加申込はこちらから
千葉市立郷土博物館
043-222-8231

※応募多数の場合は抽選とさせていただきます。



伝 狩野孝信筆『酒天童子絵巻』(17世紀、東京国立博物館蔵)



逸翁本『大江山絵詞』の輪郭

講師:久保 勇 (千葉大学大学院人文科学研究院・准教授)



逸翁本『大江山絵詞』の伝来と千葉氏

講師:鈴木 哲雄 (都留文科大学教養学部・特任教授)



問い合わせ先

千葉市立郷土博物館

住所:〒260-0856 千葉市中央区亥鼻 1-6-1

電話:043-222-8231

主催:千葉市 千葉大学 千葉市教育委員会 後援:千葉日报社

酒天童子の物語と千葉氏

～逸翁本『大江山絵詞』をめぐる～

「酒天童子」(酒呑童子)の物語は室町・江戸時代を通して広く流布した鬼退治譚で、現代でもよく知られています。当該の源流に近い作品が逸翁美術館蔵『大江山絵詞』で重要文化財に指定されています。現在は『逸翁本』と称されていますが、同本は明治20(1887)年まで香取神宮の大宮司家(千葉県香取市)に所蔵され『香取本』と呼ばれていました。

まず、『逸翁本』の内容と成立に関する問題について、詞書を中心に日本文学研究の立場から概説し、武士の存在意義などについても考えていきます。また、講師の鈴木哲雄氏は『酒天童子絵巻の謎-「大江山絵詞」と坂東武士」(岩波書店、2019)で、逸翁本が千葉氏によって制作され伝来した可能性を提示されました。源頼光をはじめとする武士たちが都に災厄をもたらした酒天童子を退治する物語と「千葉氏」との繋がりについて考えます。

本講座では『逸翁本』をめぐる、「千葉氏」にとっての物語と歴史の問題について考えていきます。

🌸 講演1 🌸

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭

講師:久保 勇 (千葉大学大学院人文科学研究院・准教授)

『大江山絵詞』の詞書に関する注釈研究から、成立に関わるいくつかの問題点について取り上げます。武力に加え「辟邪の力」によって武士が異形の存在を討伐した物語であること、後代に源氏一族の神話化を担う作品として流布したこと等についても概説します。

🌸 講演2 🌸

逸翁本『大江山絵詞』の伝来と千葉氏

講師:鈴木 哲雄 (都留文科大学教養学部・特任教授)

『続日本の絵巻』などに載る逸翁本『大江山絵詞』(酒天童子絵巻)の絵の見どころをスライドで紹介した上で、『逸翁本』の伝来と坂東武士、千葉氏との関わりについてお話しします。『逸翁本』の制作に千葉氏関わったという私の仮説や別の考え方などを紹介しつつ、『逸翁本』の成立や特徴について考えていきます。

【申込方法】

電子申請もしくは往復ハガキでお申込みください。お申込みの際にいただいた個人情報は、本講座以外に使用いたしません。

◇ 電子申請での申し込み

千葉市立郷土博物館ホームページ内の当該講座のページにあるリンクから電子申請によりご応募ください。



HPは
こちらから

◇ 往復ハガキでの申し込み

往信用はがきに「講座名」「申請者氏名(フリガナ)」「郵便番号」「住所」「年齢」「電話番号」、返信用はがきに「返信用の宛先」を記入の上、以下の問い合わせ先の住所へお送りください。

- ・ 千葉市立郷土博物館
- ・ 住所:〒260-0856 千葉市中央区亥鼻 1-6-1
- ・ 電話:043-222-8231

【申込期間】

2022年11月1日(火)～2022年11月22日(火)

※応募多数の場合は抽選とさせていただきます。

※往復ハガキでの申込は11月22日(火)

郷土博物館必着。

【アクセス】



JR 総武線「西千葉」駅下車、徒歩7分
(JR 総武線快速利用の場合は「稲毛」駅もしくは「千葉」駅乗り換え)
京成千葉線「みどり台」駅下車、徒歩7分



【会場】

千葉大学西千葉キャンパス
けやき会館



【ロビー】





【開 会】

【クロストーク進行】

司会
千葉市立郷土博物館 総括主任研究員
外山 信司



開会挨拶
千葉大学副学長 人文科学研究院
教授 山田 賢



【講演 1】

講師
千葉大学大学院人文科学研究院
准教授 久保 勇



【講演 2】

講師
都留文科大学教養学部
特任教授 鈴木 哲雄



以上が、透絵本『大江山絵詞』のあらすじでした。

*透絵本は、絵画表現としても、中世の物語としても、もっと内容豊かなものなのですが、本日は割愛せざるをえません。

【クロストーク・質疑応答】



進行
千葉市郷土博物館 統括主任研究員
外山 信司



【閉 会】



閉会挨拶
千葉市立郷土博物館
館長 天野 良介

目次

開会挨拶（山田 賢）	1
趣旨説明（司会 外山 信司）	2
【講演1】逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）	3
資料	13
【講演2】逸翁本『大江山絵詞』の伝来と千葉氏（鈴木 哲雄）	37
資料	47
【クロストーク・質疑応答】	76
閉会挨拶（天野 良介）	82

※本講演録は令和四年一二月一〇日に千葉大学けやき会館大ホールでの講座を収録した内容をまとめたものです。

開会挨拶

山田 賢（千葉大学副学長 人文科学研究院 教授）

ただ今ご紹介にあずかりました千葉大学の山田でございます。私の副学長としての主な職責というものは、千葉県地域の産学官の協働の下に千葉大学の教育を再構築していくことを主眼としております。そのようなわけで、私は、平素から千葉県内の産業界の皆さま、経済界の皆さまと懇談をする機会が多いのですけれども、その折に地元の皆さまが千葉県地域の歴史や文化、あるいはひいては関東、あるいはさらには日本列島のそういったものに大変ご関心をお持ちである、深い造詣をお持ちであるということに常に深い感銘を受けております。本日の公開講座は数年前より始まって、今回第四回ということになります。千葉市、千葉市立郷土博物館、そして千葉大学の連携の下に千葉開府九〇〇年を



見据えて毎年冬に開催されてきたものであります。こういった地道な学術的営為が持続してきた、継続してきたということは千葉市をはじめとする関係者皆さまのご尽力はもろろんなんですけれども、地元の皆さまがこういったものに関心を持っていただいているということが大変大きな要因になっている、地元の皆さまの地域の歴史文化に対する関心によって、こういった講座が支えられているということを常に実感しているところでございます。

さて、今回のテーマはここにありますように酒吞童子、つまり鬼退治の物語、鬼の物語ということになります。鬼というのは私たちの日常の外にあつて、平穏な日常を脅かすかもしれない異界の存在であり、それを武士が討伐して都を守護するという物語がこれから展開されるであろうと予想するのですけれども、私たちはそのことを通して中世の武士たちがどのような自画像を思い描いていたのかということ、それから房総に生きた千葉氏がそのような武士のイメージ、アイデンティティーというものにかに共感していたのかということについて、示唆を得ることができないのではないかとふうに思っております。鬼というテーマは一見すると荒唐無稽なおとぎ話の世界のように思われますけれども、このように歴史の中の武士の在り方について思いをはせるさすがにもなり得るわけです。

一方歴史に対して今度は文化、比較文化という観点から考えた場合、ここでは時間もありませんので簡単に触れるに止めますけれども、日常と異界というものをある種の分断線によつてはつきりと区分された二つの世界として認識するような世界像というのは日本列島に特有の、あるいは少なくとも日本列島において顕著に見られる想像力の在り方かもしれません。ご存じかもしれませんが、この鬼（*Oni*）という言葉は、もともとの中国語ですと死者の霊魂、幽鬼の意味であつて、日常世界のどこにでも漂っている存在であるわけです。そのような比較の観点から鬼、これをよすがとして歴史と文化に深く思いをはせることができるのではないかということでは期待をしております。皆さま、どうかその豊穡な日本列島の歴史と文化の世界をお楽しみいただければと思います。

最後に本日この講座にご参加いただいた皆さまに改めてお礼を申し上げたいと思います。芸能や舞台芸術などではよく観客の皆さまをお迎えして初めて舞台が完成するというような言い方をいたしますけれど

ども、公開講座も同じだろうと思います。観客の皆さまに入っていただいて、講師の言葉にうなずいたり首をひねったりする、そこでは言葉による双方のやりとりがあるわけではありませんけれども、こうして観覧の皆さまあつて初めて公開講座もコミュニケーションとして完結するというふうに感じております。本日はその意味で、この「公開講座」を完成させるための支援をいただき、皆さまご来場本当にありがとうございます。

趣旨説明

司会 外山 信司（千葉市立郷土博物館総括主任研究員）



山田先生、ありがとうございました。では続きまして、本日のテーマであります「酒天童子の物語と千葉氏—逸翁本『大江山絵詞』について—」というところで、私から趣旨をご説明させていただきます。

伊吹山という本もあるんですが、大江山に住み、都から人をさらって食らうという鬼、酒天童子を源頼光や藤原保昌、四天王たちが退治するという「酒天童子の物語」は室町、江戸時代を通じて広く流布した鬼退治のお話です。今でも大変よく知られていると思います。この話の源流にごく近い作品が、大阪府池田市の逸翁美術館が所蔵する『大江山絵詞』と

いう絵巻で、国の重要文化財に指定されています。現在は「逸翁本」と称されていますが、この本は明治二〇年（一八八七）までは、なんと千葉県香取市の香取神宮の神官、大宮司家に所蔵されていました。従って「香取本」と呼ばれる場合もあります。本日の講師の鈴木哲雄先生は、岩波書店から二〇一九年に刊行された『酒天童子絵巻の謎「大江山絵詞」と坂東武士』という御著書で、逸翁本が千葉氏によって制作され、千葉氏のもとに伝来した可能性を提示されました。

今回の講座では、まず作品の内容と問題点について日本文学研究の立場から解説をいただいた上で、源頼光をはじめとする武士たちが都に災いをもたらした酒天童子を退治する物語と、この千葉の地を本拠地とする武士団、千葉氏とのつながりについて考えていきたいと思います。本日は逸翁本を巡る千葉氏にとっての物語と歴史についてのさまざまな問題を考えることを通して、間近に迫りました千葉開府九〇〇年に向けて、千葉市の地域資源である千葉氏の理解を深め、郷土千葉市へのご関心を深める機会としていただければ幸いです。

各講演へのご質問は、配布しております質問票にご記入の上、会場を出た後ろに質問箱がございますので、そちらにご提出ください。クロストークの後にお答えさせていただきます。なお、時間の関係で全てのご質問にはお答えできない場合もあるかと思いますが、その際はお許しください。またアンケートを用意してございます。今後の、来年も継続していくであろう、この市民講座の企画運営等の参考にさせていただきます。ぜひアンケートにご協力をお願い申し上げます。

【講演1】

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭

久保 勇（千葉大学大学院人文科学研究所 准教授）

講師紹介

久保 勇（千葉大学大学院人文科学研究所 准教授）

二〇一〇年からこの千葉大学と千葉市による公開市民講座での講演のみならず、この公開講座の企画運営にも携わってこられました。千葉大学文学部大学院修士課程・博士課程を経て、二〇〇〇年に大学院社会文化科学研究科の助手となられ、現在は人文科学研究所の准教授をお務めです。

ご専門は中世文学、軍記物語の研究で、延慶本『平家物語』を研究対象の中心とされており、二〇二一年には「近世・延慶本三写本の実態と環境について」、二〇年には「延慶本平家物語の伝来と流布」という論文を発表されています。その他『平家物語』およびそれ以前の軍記物語も対象とした中世前期の武士の描かれ方や、近代における軍記物語に関わる文化の諸状況についても研究を深めています。

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました千葉大学の久保と申します。ご紹介いただきました通り、私の研究対象は延慶本『平家物語』なのですが、今日のお話は逸翁本『大江山絵詞』ということになるわけで、なぜ私がこの作品を取り扱うことになったのかという経緯に

ついて、簡単に説明してから始めたいと思います。

この『大江山絵詞』には、比叡山延暦寺の開闢説話、伝教大師かいびやくの最澄が比叡山を開いたというお話が入っています。私が卒業論文で取り上げ、大学院に進学する契機になった話が、延慶本『平家物語』巻一にある「後二条関白殿滅給事」ほんひたまふこと。「願立説話」がんたてと言われるものです。そこに比叡山延暦寺の開闢、伝教大師の事蹟が語られておりまして、逸翁本『大江山絵詞』にも通ずる諸問題があるだろう、ということから、その後学会発表で取り上げたわけです。

今日のお話ですけれども、私は前座ということで、肩の力を抜いたお話というか、皆さんにとって身近な「鬼退治の話」として、現代にまで伝わってきたところの概史→スライド2の構成2です。具体的には「酒天童子の物語」の伝播について、広く伝わる契機となった幾つかの本を紹介していきます。

それからスライド2の構成3に挙げた「研究史の輪郭」と「問題の所在」という内容です。ここでは主要な研究史について、この物語をめぐってどのようなことが研究者によって問題化されてきたか、ということを紹介いたします。

それからスライド2の構成4として、詞書による二、三の考察を挙げています。私が以前取り上げた比叡山の問題、そして「千葉氏」に関する問題として藤原保昌ほうしやうの存在について考えていきます。

皆さんにお配りしている資料ですけれども、まずお手元ご確認いただ



きたいのですが、全部で7ページとなります。私の資料はスライドで紹介する内容の関係資料ですが、これはとても講演時間内では全部読めませんので、重なる部分にはアンダーラインを引いてあります。スライドの方で資料の参照指定を記載してありますので、適宜ご覧いただければと思います。

それでは、まず資料1ページで引用させていただいた【参考1】についてです。『大江山絵詞』とはどういう作品か、という説明です。また、まわってわたりやすいので、榊原悟氏の解説を引用させていただきました。物語自体の概要は「主題」と書かれているところ。撰津守源頼光が、家来の四天王や丹後守保昌らとともに丹波の大江山に棲む酒呑童子を退治する物語」とありまして、いわば「鬼退治」ということな

ります。また「しゆてん童子」として「御伽文庫」二十三篇にも入れられた著名な武勇伝説である」ともあります。鈴木先生のご講演とも重なりませんが、まずこのお話の分類において「酒天童子の棲処」が二ヶ所に大別されます。一つが丹波国の大江山、もう一つが近江国の伊吹山で、伊吹山は説話世界では盗賊の居場所としてよく知られているところ。また、皆さんが色鮮やかな彩色でご覧になったことがある「酒呑童子絵巻」は、サントリー美術館蔵本の伊吹山系のものになります。「古法眼本」（絵・狩野元信）として大

永二年（一五二二）に制作され、北条氏綱が発注したものです。

一方、今日取り上げる大江山系の最古本とされるものが「逸翁本」となります。また「解説」から理解しておいていただきたいのは、この作品の制作に比叡山延暦寺が関与している部分があること、さらに現存の逸翁本の「絵」についてです。東国圏で制作された他作品と画風が通じていることについて、美術史研究の相澤正彦氏は、逸翁本の絵が東国で、あるいは鎌倉の地で制作された可能性を考えてよいのではないかと指摘されています。これらについて頭に残していただきたいと思っています。

それから資料2ページ目、【参考2】【参考3】で主要人物として解説を載せた源頼光と藤原保昌についてです。これらはあくまで辞書的な説明です。

ここでスライド3の「頼光と四天王」についても触れておきます。源頼光の家来たちが「四天王」と称されていること、逸翁本詞書でもそう紹介されるわけですが、スライドの写真をご覧いただくとわかりますように、仏教の「四天王」に由来します。この写真は奈良のものですが、上が北方を守護する「多聞天」で、単独の像です。「毘沙門天」とも称されます。この足下に注目していただきたいですが、スライドを拡大してお見せできないようです。

すみません。足下をご覧いただくと「邪鬼」＝鬼を踏みつけている姿が確認できます。東西南北を守護する四天王Ⅱ「多聞天・增長天・持国天・広目天」、これらが鬼を虐げています。つまり、「邪鬼」を退ける存在というのが基本にあつて、「頼光の四天王」となりますので、「四天王」の前提としてスライドで仏像を紹介いたしました。保昌の解説については最後に触れますので、余裕がありましたら【参考3】の解説をご覧ください。

それでは次のスライド4に移ります。こちらが有名な「講談社の絵本」で、戦後のものです。「講談社の絵本で『大江山』読んだ」「見かけた記憶がある」という方、どのくらいいらっしゃいますか？《会場反応なし》

ほとんどいらっしやらないようです。こちらの「解説」では、「源頼光たちの勇ましくも、けなげな活動がうまく織りこまれて、読む人の心に、こころよい興奮を与えます」とか「強い正義心の勝利が、読む人に明るい希望と喜びを与えてくれます」といった具合に、鬼退治の勇ましい武士のお話として、戦後も子どもたちに伝えられ続けたことがわかります。逸翁本と比べてみますと、スライド5の鬼の姿で頼光に酒を勧める場面とか、スライド6の酒天童子の寝所を襲う様子が異なります。逸翁本ですと、酒天童子の寝所がかなり堅牢な「鉄石の室」で造られていて、なかなか破れないと書かれています。絵本の方はたやすく寝込みを襲う描写です。スライド7の凱旋場面ですが手前の人物、すぐわかると思いますが、まさかりを担いだ蓬髪ほうまつの武士がいます。これが坂田金時さかたかねときと金太郎となりませんが、逸翁本『大江山絵詞』では酒天童子の首が大路を渡されるシーンはクライマックスで、重要な問題を含みますが、絵本の世界ではこうしたものは捨象されてしまっています。以上から、現代に伝えられた作品は、逸翁本からはかなり離れていった「鬼退治の物語」であることがわかりいただけると思います。

スライド8に移ります。これはいわゆる「スピンオフ作品」とも言えますが、『金太郎』の絵本です。「頼光四天王」の坂田金時のお話ですが、『金太郎』の注目すべき部分は鬼退治を果たして立身出世を遂げた結果だと考えがちですが、「解説」では「金太郎の、一番愉快な、心を打つ舞台は、足柄山につきていたのでありましょう」とあって、足柄山で動物たちと一緒に成長した金太郎の姿が魅力的と説かれています。スライド9の有名なこのシーンとなります。こちらは「山の中で異常に成長する武士」という問題に関わっています。こうした『金太郎』の淵源に中世説話世界の「異常成長譚」「異常誕生譚」という要素がある、ということ念頭においていただきたいと思います。スライド10は頼光に取り立てられる場面で、金太郎のお母さんが息子を家来にしてくださいと嘆願しているところです。

スライド11は鈴鹿峠の鬼退治です。鈴鹿峠の鬼退治に金太郎が行くわけですが、金太郎の容姿が赤鬼のように赤かったため、鬼たちが同族だと思つて棲処すまかに引き入れたという展開です。

「鬼」と「武士」があまり変わらない存在という認識は、これから紹介する研究史で指摘される場所ですが、現代に伝わる絵本の世界でもさまざまな問題を伝え続けていることがわかります。

次のスライド12は、やや遡つて明治期の巖谷小波いわやこなみによる『日本昔噺』の表紙です。ここで注目されるのは、一佐竹昭広氏の『酒呑童子異聞』で指摘されていますが、明治文明開化の時代に巖谷小波が「大江山の酒呑童子と云つても、お話では鬼ですが、元より此世に鬼の居さうな筈はありませんから」と、現実のものではなく譬え話として子どもたちへ読者に伝えていることです。その正体を「実は鬼の様におそろしい大盗賊」と説明しています。こうした目には見えないもの、現実には存在しないものとして「酒天童子の物語」を小波が紹介していることから、「明治」近代の問題が考えられます。

続いてスライド13ですが、先ほど申しました酒天童子の首が退治されて都にもたらされる様子が、神田明神祭礼の「附祭」で再現されている様子です。『江戸名所図会』の有名な絵で、こちらの説明には「隔年九月十五日に／執行ふ氏子の／町々より練物楽車等を／出す中にも大江山凱陣」とあります。人の目を引く「だんじり・練り物」であったことがわかります。その他には「牛若丸の奥州下り」なども紹介されています。スライド14から、この様子が外国人にも注目されたことがわかります。これも有名な図ですが、スイスの外交官のエメ・アンペールという人が一八六三年に日本に滞在した経験から、帰国後の一八七〇年『江戸名所図会』を基に制作した版画です。一方、左下の兜に食らいつく酒天童子の首の絵が表紙となっているのは「ちりめん本」です。『日本昔噺』を英訳したもので、和紙に多色刷を施したために紙がクレープ状になってしまうことから「ちりめん本」と呼ばれます。以上のように、近代日本



にはこうした外国人からの注目がありません。前後しますが、スライド15が酒天童子の大路渡しの元となった逸翁本の場面です。このように人の目を引く場面は、現代の我々にも影響しています。左下は神田明神の祭礼を企画される方々が、平成一九年に「大江山凱陣」を附祭で再現した様子です。さらに時代を遡り、江戸時代に「酒天童子の物語」がどう伝わってきたかということになります。一番有名なものは、先に触れた『御伽草子』の世界でしょう。

スライド16は渋川版の『御伽文庫』で、我々がよく知るお伽話二十三編となります。渋川版というのは大坂の本屋さんの渋川清右衛門という人が出版した絵入板本なのですが、その二十三冊目が「しゅてん童子」というわけです。

スライド17は、この公開市民講座で取り上げたいと考えている『前太平記』という作品で、寛文年間―年代でいうと一六六〇年代―、作者は藤元元と伝えられています。この作品は歌舞伎の「世界」や、先ほど挙げました明治の童話の「大江山」の典拠になっていて、巻二〇に「酒天童子の物語」が描かれています。『前太平記』は、江戸時代を通してかなりの影響力を及ぼした作品なのですが、実はあまり研究されておりません。注釈書も詳しいものは、まだ出ていない状況です。鈴木先生のご著書の中では、スライド

に引用しましたように「『前太平記』の「坂東武士」論は、荒唐無稽な作り話というのではなく、中世に形作られた坂東武士論の再話であった。」と論じられています。『前太平記』の世界が、江戸時代にあつて中世の武士たちをどう捉えているか、という問題はかなり重要と考えます。たとえば「千葉氏」のことは、巻二四の忠常の話から始まっており、江戸時代に千葉氏がどのように認識されていたか、という問題が読み取れます。「千葉氏」はもう滅びているわけですが、失われた一族を考える上で、『前太平記』という作品は有効となります。

以上、かなりの影響力を及ぼしたと考えられる主要な作品を紹介してきました。ただし、これは逸翁本に限った影響ではなく、「酒天童子の物語」という―細かく見ればかなり中身違うものを包摂した―大きな枠組みですが、江戸時代、明治、大正、現代まで伝わってきた概略は理解いただけたと思います。

スライド18の研究史の話題に移りますが、配付資料ですと2ページの【参考4】以降となります。「酒天童子とは何なのか」という、原義に関わる問題となります。なお、これから紹介する主要研究史は私の判断によるもので、―多くの研究者によるお仕事の成果はございますが―注目される重要な成果に限って紹介することをお許しただきたいと思えます。

まず、佐竹昭広氏ですが、酒天童子のもともとの姿というのは山中に捨てられた、そして異常に成長した童子のお話、いわゆる「捨て童子」の話から発していると論じられています。その幾つかの例は、資料に挙げられておりますように「伊吹童子」や「役行者」^{えんのかみやくしや}、有名などころでは「武蔵坊弁慶」、それから「平井保昌」などとなります。これは冒頭で触れた藤原保昌と同じ人物です。

この「異常成長譚」につきましては、配付資料6ページの【資料8】真名本『曾我物語』巻二となります。「真名本」とは漢字で書かれた『曾我物語』で、その後成立した「仮名本」は一四世紀前半までに成立し

たとされていきますから、一三世紀末から一四世紀初め頃の作品と考えていただければよいと思います。京都の北部、福井との境に位置する「荒血山」という所に保昌が捨てられ、獣たちに危害を加えられることなく成長し、比叡山山麓の獵師が拾って育てたという内容です。

このような「捨て童子」が「しゅてんどうじ」というように転訛したというのが佐竹氏の説です。「しゅてん」については―鈴木先生からお話があるかも知れませんが―、「酒呑」ではなく、最も古い逸翁本詞書で童子本人が酒の「天」―ソラ、アマ―の童子だと名乗っているのが、本講座タイトルは「酒天童子」と表記させていただいています。佐竹氏の論をかなり端折っているので、思い付きではないかと思われる方もいるかもしれませんが、学界的には支持されている説と加えておきます。

二つ目に紹介するのが歴史学の成果です。神戸大学にお勤めだった高橋昌明氏の『酒呑童子の誕生』です。こちらの本は文庫本で今でも入手できますが、同書から二つ取り上げます。まず、この物語が都の「四角四塚祭かどしよんざかまつり」に関連し、〈境界〉として的大江山が舞台になっていることです。そして、酒天童子の正体について、詞書に「正暦年中」とあることから、当時流行した「疫病」すなわち「疫神」「鬼」として具現化した存在として描かれていると指摘されています。

スライド19の地図でお示ししている〈境界〉ですが、「四角四塚祭」の「四角」は京都の条里制の境目、「四塚」が京都周辺の地域に定められた境目ということになります。「北」が京都から琵琶湖に下っていく途中の「和邇わに」、私などは『平治物語』で源義朝が敗走する「龍華越りゅうげこえ」という方が馴染み深いです。そして「南」が山崎、千利休でも知られずし現在は大きな醸造所もあります。「東」が百人一首の蟬丸。「知るも知らぬも逢坂の関」で知られる逢坂の関です。そして「西」が大江山ということになります。京都にとって悪いモノが入ってくる境目、〈境界〉として大江山の地について詳細に論じられたのが、高橋氏のご著書ということになります。

もう少し易しい話をいたしますと、皆さん節分の時に「鬼は外、福は内」とやりますね。「玄関」、家屋の〈境界〉となりますが、そこで「ウチ」と「ソト」で区切り、玄関より「ソト」に悪いモノを追い払うという、宮中行事では「追儺式ついなしき」にあたるわけです。こうした〈境界〉の考え方が、この物語の舞台設定に強く影響しているのは歴然かと思えます。

スライド20は小松和彦氏の研究です。「鬼」や「妖怪研究」で著名な小松氏ですが、ここでは二つ紹介します。一つ目は佐竹氏が述べた「捨て童子」と重なるわけですが、英雄と怪物は同根の異なる存在だということ。やはり異常な成長をする者たちという点に注目されています。それからもう一つ、酒天童子の首が都にもたらされることについて問題化されています。中世王権説話における〈外部〉⇨悪いモノとなりますが、その根源たる悪いモノが「酒天童子の首」に象徴され、それが討たれて都の〈内〉にもたらされるわけです。この意味について、結局〈内〉なる「王権」が秩序を回復すること、つまり〈外〉の敵から秩序を取り戻すという物語として捉えています。いわば「酒天童子の物語」を構造化して説明した研究といえるでしょう。

スライド21は美濃部重克氏の『まつろわぬものの時空 酒呑童子絵を讀む』です。「まつろわぬもの」というのは、簡単に言えば「言うことを聞かない者たち」です。かつての神話世界では「土蜘蛛」などが「まつろわぬものども」として登場してきたわけですが、その系列に「酒呑童子」を挙げているわけです。私が注目したのは、討たれた酒天童子の目がつむつてないという指摘です。非常に細かい描写なのですが、上の大路渡しの絵で酒天童子の複数の目が潰れていない。再び開けるといふ部分です。詞書によれば、酒天童子は首をはねても退治できず、首が生き続け反撃してきます。下の絵に描かれているように、最終的にどこを刺すのが目を「抉る」⇨えぐる行為となります。目をえぐってどこめを刺したはずですが、大路渡しの絵段階で再び目を開けている。これは一体何を表しているのか、という問題提起です。絵師のミスかとは考



えず、美濃部氏は「世を乱す機会を再び伺う首」と読み取っておられるわけです。美濃部先生ならではの、文学的な発想に基づく「読み」を提示されている比較的新しい研究として紹介した次第です。

駆け足でみてまいりましたが、スライド22で一度まとめさせていただきます。ここまでの前半では、近現代に至る「酒天童子の物語」は「怪物」「鬼」を退治する武士の活躍劇であり、世を乱すモノを滅ぼす勇敢な武士を讃える物語として読まれ続けてきたことを紹介しました。後半の研究史では「酒天童子はいかなる存在か」「この物語は何を表しているのか」という問題を取り上げてきました。ひとつは〈境界〉をめぐる〈内〉と〈外〉を往還し「災い」を退ける物語としての理解です。これは基本的に「鬼は外、福は内」と同じことになろうかと思えます。

もう一つが王権の秩序を回復する物語という理解です。詞書を読んでききますと、酒天童子はもともとこの辺(スライド19地図)の和邇(龍華)にほど近い比良山という所にいたので、伝教大師の比叡山開創によって追われていくわけです。「四角四堺」の〈境界〉から見ると、「北」の境周辺にいたモノが「西」の大江山に移動する話になっています。都の北東では伝教大師がいて退けられましたが、大江山にそのような存在はありません。では、誰を遣わして酒天童子を退治するかという問題となり、「武士」が登場することと

なります。つまり、王権の秩序を回復する「担い手」として、仏法と〈武〉が浮上してきます。

「酒天童子はいかなる存在か」という問題については、「異常に成長したモノ」＝「捨て童子」という解釈があり、かなり支持されていると申しました。「病氣」には限らないと思うのですが、やはり「災い」をもたらず存在＝「厄災」という抽象化されたイメージが具現化した、という理解も間違いないと思います。皆さんも節分の時、実際に自分の家に「鬼」が来ると思って、本気で豆を撒いていないと思います。やはり「病氣」とか「事故」とか、そういった「災い」が家に入っていないように豆撒きすると思います。こうした実態のない「厄災」というのが「物語」に表されているわけです。それから「酒天童子」と「武士」の存在の関係性です。ここでは真名本『曾我物語』によって紹介した保昌を挙げていますが、「同根で異なる存在」ということです。ここまでが大枠としての「酒天童子の物語」の理解で、逸翁本に必ずしも限定しないお話しですが、「酒天童子」がこうした存在であるという「輪郭」はご理解いただけたかと思えます。

スライド23からは文字ばかりになるので、見えにくい部分があるかも知れませんが、逸翁本の「酒天童子の輪郭」についてです。こちらは詞書の引用になりますが見ていただくと、閑院の右大将実見の卿が「斯かる変化の者も、王土に跡を留めながら、争か^{いかで}天氣に従はざるべき。」と述べています。要するに、天皇が統治するこの国土にいたのであれば、天皇の言うことを聞かないということはないだろう、ということですね。同じことが酒天童子本人からも語られています。「桓武天皇、又勅使を立て宣旨を読まれしかば、王土にありながら、勅命さすがに背き難かりし上」と、自分で言っているわけです。つまり、天皇の命令には逆らえないので自分は移動した、と自らの過去を話しています。こうした話の前提として、既に文学研究で指摘されていることが、資料4ページ【資料1】に挙げました『古今和歌集』古注釈の説話です。「藤原千方^{ちかた}説話」とい

われるもので、鬼神四人を従え言うことを聞かない藤原千方を退治しに行くという話です。ここでは「和歌」の力によって鬼神を天皇側に従えることができたという展開となっており、『太平記』にも載っています。

『古今和歌集序聞書三流抄』は弘安年間の末までの成立とされているので、一二八八年あたりに出来たということとなります。実際、「酒天童子の物語」でも「千方説話」が直接利用されている「慶応大学本」などがあります。資料引用部の下線部、「武キモノ、フ・鬼神ニ至ルマデモ哥ニハ心ヲ和グルニ依テ」とあります。これが、どのような立場の人から発せられたか考えますと、和歌を嗜む人でしょから「貴族」や「学者」などが想定されます。そして「鬼神ハ極テ心直ナル者也」とも位置づけられ、ここで詠まれる実際の和歌では「土モ木モワガ大君ノ国ナレバ何クカ鬼ノ宿卜定メン」とあります。こうした「天皇の土地であるから鬼の宿を云々」という内容も先ほどの、酒天童子が逸翁本で述べる論理と同様、天皇の言うことを聞かざるを得ない、という点で一致します。以上のように、最も古い「酒天童子の物語」である逸翁本に、「千方説話」は相応の影響を与えていることが考えられます。

続いてスライド24、「②異類退治の武士」についてです。こちらは資料4ページから5ページにかけて、私が研究対象としている延慶本『平家物語』の本文で、いわゆる「ヌエ退治」。源頼政によるヌエ退治の話となります。ここで指摘したいのは、ヌエを退治せよと命令される頼政と『大江山絵詞』の方で頼光・保昌が酒天童子退治の勅命を下された、双方の反応が似通っていることです。『平家物語』をご覧いただくと、「頼政申サレケルハ「昔ヨリ朝家ニ武士ヲ置ル、事、逆叛ノ者ノヲ退ケ、違勅ノ者ヲ亡サンガ為也。『目ニモミエヌ変化ノ者仕レ』ト仰下サル、事、未ダ承リ及バズ」とあります。要するに「武士」は朝敵を滅ぼす存在で、怪物退治する者ではない、という主張です。スライドの『大江山絵詞』詞書引用では、「各申されけるは、「誠に弓箭の道には、偏に朝敵を平らげんが為也。夫れ、仰せを辞し申すに及ばず。〈中略〉是は姿を見ざる

天魔、声を聞かざる鬼神也。合戦を遂ぐる事、人力及び難き」とあります。朝廷から怪物退治を命令され、それに対する武士たちの言葉が、パターン化していることが理解できると思えます。

その他でも注目される問題として、スライド左端に示してありますが、明治に出版された『考古画譜』では「詞盛衰記 平家物語の口記にて太平記よりはふるし」と評されています。『大江山絵詞』詞書の文体が、軍記物語とよく似ていることは皆さんもお気づきだと思います。

もう少し加えますと、ヌエ退治をした「頼政」はどのような武士か、ということですが、この系譜は「頼光」から下ったところにあります。系図をお示しすれば良かったのですが、「頼光―頼国―頼綱―仲政―頼政」となり、大内裏を守る源氏の武士の系譜の末にある、頼政がヌエ説話において今指摘した勅命に対する対応をしているという問題です。

スライド25、「③物語と〈仏法〉」―蓑笠の三人と「籠」についてです。ここからは比叡山延暦寺での成立問題に関わることとなります。いわば逸翁本における「仏法」の問題です。これには多くの問題箇所があるわけですが、今回私が着目している問題はキーワードだけ先に申しますと、「隠れ蓑」「龍樹菩薩」の存在、それから「銅の籠」「鉄石の室」からの解放というものです。それらの様子から見えていきます。

スライド25の「絵」ですが、鬼たちのいる建物は絵巻の技法によって透けて描かれています、そこを三人の蓑笠を被った僧侶が窺っています。手前の僧がわかりやすいのですが、身体が透けて「床」が描かれています。蓑笠の僧侶たちが透明化している表現で、中の鬼たちからは彼らが見えていないわけです。この蓑笠が「龍樹菩薩の隠れ蓑」と考えられるわけです。

続いてスライド26ですが、三人の僧が窺っているのは都から捕らえられた人々です。詞書に「銅の籠を作て女房四□人こめおきたる中に、いと清げなる児の、十四五ばかりなるが」とあり、この稚児は慈恵大師の弟子が『法華経』を誦読して、絵にあるように雲に乗った諸天が現れて



いる様子です。これは『法華経』の功德を述べている場面で、『法華経』の素晴らしさを伝える内容になっています。閉じ込められた空間から『法華経』の真義が明らかになるという展開に関連して、資料5ページの【資料4】をご覧ください。この本は『溪嵐拾葉集』と読みます。比叡山の――宗派ではなくて――住侶たちの職掌として「顕・密・戒・記」という四家があり、その中の「記家」に伝わる秘伝を記した資料となります。これは南インドが舞台の「南天鉄塔説話」と言われるもので、龍樹菩薩がその塔から真言密教の秘宝を取り出した、という話として知られています。「南天鉄塔説話」は、凶になった資料もありますが、逸翁本の絵と通ずるところはありません。最近、日本人が南インドの仏教遺跡を発掘したニュースをご存じかもしれません。「マンセル遺跡」ですが、ここ

が南インドの「南天鉄塔」ではないかと言われています。それを開く、という記家の伝承です。スライド27ですが、これは鬼たちが隣室にいて、天竺、震旦の人々が捕らえられており、この左側に蓑笠を被った三人が様子を窺っている姿が描かれます。詞書には「我朝にもかぎらず天竺震旦の人までもとりおきたる」とあります。我朝＝本朝、天竺＝インド、震旦＝中国と挙がれば、仏法が渡ってきた道を表しますので、こうした人々が閉じ込められている状況をどう読み解くかといえ、天竺・震旦・本朝の「仏法」が想起され

るわけです。

平安後期の『今昔物語集』にはインド・中国・日本の説話と分かれ、仏教説話が収められています。やはり、この様子は「仏法」が閉塞した状況を解放する、という状況を表しているのではないのでしょうか。

スライド28に移ります。初めに紹介した絵本のところで、逸翁本で「酒天童子の寝所が非常に堅牢であつたと申しました。詞書では「童子、鐵石の室を強く構へて、その中にぞ臥したりける」とあり、童子が非常に堅固な所にいるので中に入れない、と記しています。この「室」を開けるのは誰か、ということになりますが、「何にしても此の戸を開くべき様なかりけるに、老ひたる、少き二人の僧、「年来の行功只今なり。本尊界会、穴賢、本誓誤り給ふな」とて袈裟の下に印契結びて、暫く祈念し給へば、固く閉ぢたりつる鐵石、朝の露と消え、由々しく見えつる寝所は一時に破れにけり」と続いています。「老ひたる、少き二人の僧」の祈禱というか修法によって、あつという間に破れたという内容です。つまり「仏力」あるいは「神通力」というような、宗教的な力によって解放されたわけです。以上のように、人々を閉じ込めていた「籠」や酒天童子の「室」などを解放する力は、「武力」ではなく「仏法」であったと読み取れますので、インドの「南天鉄塔」を龍樹菩薩が開いた話が下敷きになっていた可能性が考えられるわけです。

スライド29に移ります。「隠れ蓑」を使うことも、この考えの補強材料となります。龍樹菩薩が身を隠す＝透明化する、という「隠身」の話は、『今昔物語集』『打聞集』『古本説話集』『宝物集』などの説話集に登場します。また逸翁本の「別巻詞書」では、安倍清明が「秘密真言の棟梁、竜樹菩薩の変化也」と書かれており、「龍樹菩薩」に対するこの作品の意識を考えさせる記述となっています。さらに資料5ページ【資料3】の『梁塵秘抄』を挙げておきます。後白河院の当時に流行した「今様」に南天鉄塔が歌われており、その存在自体は広く知られていたことがうかがわれます。その上で資料5ページの【資料4】を振り返ってみると、

比叡山延暦寺の「記家」による南天鉄塔秘伝が逸翁本制作の背景にあることが想定されるわけです。お聞きの皆さんにとっては難しく、一度お聞きになっても久保先生の思い付きではないか、と思われるかも知れません。紹介できませんでしたが、既に研究史で明らかにされている比叡山延暦寺の他の資料との関係を併せれば、「南天鉄塔説話」が逸翁本に關係している可能性はあると考えています。この内容を学会発表したわけですが、今日はややくだいてお話しいたしました。

あと残り5分程度ですが、スライド30に移り、「千葉氏との関連」について、保昌に注目してみたいと思います。スライドに引用した陽明文庫本は、詞書のみが残るもので逸翁本に先立って成立したと捉えられています。保昌は「白きひるまきの太刀に虎皮のしんざや入てはき」と書かれており、逸翁本の絵では右側の人物の刀の鞘に獣の皮のカバー（サック）が付けられています。

「尻鞘」を初めて聞いたという方もいらっしゃるかも知れません。これには熊の皮、豹皮や虎皮が使われています。平安時代、貴族たちが儀式の折に太刀を佩く時、刀の装飾として「豹」や「虎」といった輸入の毛皮を付けた尻鞘を使用していました。スライド30に【参考】として挙げております『筋抄』では、記主の父親である中院通親の日記を引用して、官位が五位の者は虎皮を、四位の者は豹皮を付けることが書かれています。『筋抄』は装束に関する記録を集めた書で、こうしたことが書かれているわけです。それから資料6ページ【資料9】【資料10】をご覧ください。まず【資料9】の『檜垣嬭集』ですが、解説も何も記していないので、補足いたしますとこの歌集は西丸妙子氏の研究（『私家集全釈 叢書9 檜垣嬭集全釈』風間書房、一九九〇）によれば永祚二年（九九〇）からあまり隔たらない時期に成立したとされています。「虎の皮の尻鞘を題にて肥後の守の詠ませしに」とあり、肥後守という立場の国司が「虎皮」で詠んでいる点が注目されます。【資料10】の『夫木和歌抄』ですが、成立がおおよそ延慶三年（一二二〇）とされる歌集で、この中で権僧正公

朝という人―中川博夫氏の研究（『僧正公朝について―その伝と歌壇的位置―』『國語と國文學』一九八三・九）によれば園城寺（三井寺）の寺門派の僧で鎌倉で主導的な立場にあった―が、「ものゝふのさげはく太刀のしりさやの 虎のおふみておそろしのよや」と詠んでいます。虎皮の尻鞘を付けた存在＝武士が恐ろしいことを、危険に身をさらす意味の「虎の尾を踏む」をかけて、武士が台頭する世を詠んだものです。「虎皮」の表現については、以前論じて後から調べが進んでいませんが、これらの状況からも保昌が「虎皮の尻鞘」を付けていることは注目して良いかと考えます。後の時代の「酒天童子の物語」である『前太平記』では、頼光の方が「虎皮の尻鞘」を付けています。頼光の方が武力に優れた強いメインキャラクターですので、先の資料で見た恐ろしさという点で当然かと考えられます。そうになると、逸翁本で保昌が「虎皮の尻鞘」を付けているのは、何か特別な意味があったのではないかと考えられるわけです。【資料11】として挙げたのは、建武年間―建武の新政―にいわれる「婆娑羅」＝派手な武士の装束が禁止された条項に「唐皮尻鞘」（唐皮は虎皮と解されます）が出てくることです。以上のように、時代毎に「虎皮」をめぐる認識の変遷が存在するわけで、研究史上では保立道久氏が「虎の皮」に注目されています（『物語の中世』東京大学出版会、一九九八）。大陸から渡ってきたモノが「権威」やその象徴になるということ、またそれらを手可能な財力などを表しているわけです。「虎皮尻鞘」が何かの象徴として描かれている問題は注目されると思います。スライド31の「千葉氏との関連」における具体的な問題ですが、これは資料5ページから6ページにかけての【資料5】『千学集抜粹』となります。こちらに千葉氏の宝として藤原保昌の刀が伝えられたという話が載っています。この後、「クロストーク」でも話題になるかも知れませんが、この「宝生」＝保昌の刀が千葉氏に伝わったという記事をどう考えれば良いかという問題です。まず【資料6】【資料7】で挙げましたように、大江山系の後の時代の本には保昌の「懐剣」について記



載があります。【資料6】の慶応義塾大学蔵本では、備前国の「すけひら」という鍛冶が三年間精進潔斎して鍛えた刀だと書かれています。それから【資料7】麻生太賀吉氏蔵本では、「懐剣といふ、重代の長刀を太刀にこしらへ、長つかにし、馬の尾をもつて、ねたまきにまひたる太刀」となっています。何れにしても、保昌の太刀の話が逸翁本より後の「酒天童子の物語」（大江山系）には描かれており、千葉氏がこのような「酒天童子の物語」から宝物としての保昌の刀の情報を取り込んだ可能性があります。もう一つの可能性は享徳元年（一四五二）の刀剣伝書「刀に関する伝承を集めた書物ですが『鍛冶名字考』の中に、備前の鍛冶・助平について「一条院御宇永延年中ノ作者也 保昌フトコロ太刀此作也」という記述があることです。このような刀剣伝承もありますので、

千葉氏が宝物として伝える保昌の刀の情報をどのように取り込んだのかその実際は分かりませんが、逸翁本の保昌の描かれ方Ⅱ「虎皮の尻鞆」を帯する姿と千葉氏との関連は考えるべき問題があると思います。

最後にスライド32で「まとめ」といたします。本日の前半部分では「酒天童子の物語」が長い時間をかけて、広く多くの人々に受容されてきたことを見てきました。これらは、現存する最古の「酒天童子の物語」が成立した当初の状況を考える上で確認しておくべきことだと考えます。※印でスライドに記載しま

したが、この問題は「絵巻の制作意図」と「受容」が必ずしも一致しないという問題に関わります。一例を挙げると『後三年合戦絵巻』という作品があります。源義家が「後三年合戦」に勝利して都に戻る、という話ですが、きちんと見ていきますと、朝廷からは私戦に介入したと判断され、恩賞もなく手ぶらで都に帰るといふ結果で、取ってきた「首」は全部水たまりに捨てた姿が最後の絵で描かれます。義家は公的に認められない戦いに介入したわけで、その描かれ方も既に指摘されているように「閻魔大王」のように大きく描かれていたり、合戦後に千任を拷問する場面は残忍な存在としか映りません。このような描かれ方から見ると、源義家の活躍を讃える絵巻ではないと考えます。ところが、後の時代ではやはり源氏の英雄Ⅱ八幡太郎の活躍の絵巻として認識されているようです。このように絵巻に描こうとした制作者側の当初の意図が、後の「受容」と一致しないことはあると思います。逸翁本自体、先ほど説明しましたように比叡山の仏教に関わる深遠な秘伝が込められている可能性があるわけですが、それを読む側が受けとめてきたか、というところと大多数においては無理だったでしょう。制作の意図と受容のズレは多分にあったと考えられます。

申し訳ありません。ずいぶん散らかった話となりましたが、以上で私の話を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

レジュメ

令和4年12月10日（土）於：けやき会館大ホール

令和4年度 千葉市・千葉大学 公開市民講座

酒呑童子の物語と千葉氏 ～逸翁本『大江山絵詞』をめぐって～

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭

千葉大学大学院人文科学研究院 准教授 久保 勇

構成

- 一 逸翁本『大江山絵詞』概説
- 二 酒呑童子の物語の伝播
「講談社の絵本」／「日本昔噺」／神田明神祭礼／渋川版御伽文庫／『前太平記』
- 三 研究史の輪郭と問題の所在
佐竹昭広氏『酒呑童子異聞』／高橋昌明氏『酒呑童子の誕生』
小松和彦氏『神々の精神史』『酒呑童子の首』／美濃部重克氏『酒呑童子絵を読む』
- 四 詞書から二、三の考察
①酒呑童子の輪郭／②〈異類退治〉の武士／③物語と〈仏法〉／④千葉氏との関連—保昌の存在
※ 以下【参考】【資料】の下線は久保による。

【参考1】逸翁本『大江山絵詞』（榊原悟氏執筆・宮次男ほか編『角川絵巻物総覧』角川書店、1995）

大江山絵 二巻

大坂 逸翁美術館蔵 重要文化財 南北朝時代（十四世紀） 紙本着色

上巻 詞五段・絵十一段（三五・二×一四八九・〇cm）

下巻 詞六段・絵九段（三五・二×一三七六・〇cm）

付属の詞書一卷（三〇・三×三八七・五cm）

主題 摂津守源頼光が、家来の四天王や丹後守保昌らとともに丹波の大江山に棲む酒呑童子を退治する物語。「しゆてん童子」として「御伽文庫」二十三篇にも入れられた著名な武勇伝説である。

解説 酒呑童子の物語は、童子の棲処を丹波国大江山とするものと、近江国伊吹山とするものとの二系統に分類される、本絵巻はこのうちの前者に属し、しかもこの系統のものとしては最も古い。その存在は早くより注目されていたようで、『考古画譜』にも記載され、もと下総香取神社の大宮司家に伝来したことが知られる。

絵は正統的なやまと絵の画趣をいまだ多く残存させているが、内容的には早くものに御伽草子に受け継がれていく要素をもっており、こうした過渡的な性格により、本絵巻の成立は南北朝期と推定される。

また、本絵巻は、頼光が大江山征伐を祈願する神社の一つに日吉山王を加え、一行を助けるためにその化身を登場させたり、また捕らわれの子息の師が慈恵大師で、しかもこの子息を加護するために日吉山王の早尾権現が化現するなど、著しく叡山との関係が深い。こうした点から、本絵巻の制作も叡山との関連の中でなされた可能性も考えてみるべきだろう。

なお近年、本絵巻にみる水墨画法を取り入れた画風が、「東征絵伝」（唐招提寺蔵）や「浄土五祖絵」（光明寺蔵）、「頬焼阿弥陀縁起絵」（光触寺蔵）、「箱根権現縁起絵」（箱根神社蔵）など、いわゆる絵巻における鎌倉派のそれに近いところから、鎌倉の地で制作された可能性も指摘されている。

【参考2】源頼光について（隴谷寿氏執筆・『日本大百科全書』小学館、Japan Knowledge 版）

みなもとのよりみつ（948-1021）

平安中期の武将。名は「らいこう」とも。満仲の長男。備前、美濃、但馬、摂津などの国守を歴任し、その間、春宮大進、内蔵頭を兼任した。なかでも美濃守は二度経験しており、初回のとき隣国の尾張守となった大江匡衡と書状を交わして互いに門出を慶祝しあっている。頼光は藤原摂関家と関係を密にし、988年（永延2）には兼家（道長の父）が新造した二条京極第の落成の祝宴で、賓客に馬30匹を贈り兼家の覚えをよくした。とくに道長への追従には目を見張るものがあった。道長が主催する法華八講や30講には諸物を進上して奉仕に努め、また1016年（長和5）の大火で焼亡した道長の土御門第の再建に際して、必要な調度類いっさいを献上して道長を喜ばせ、見物の人々を大いに驚かせた。これらを可能にした経済的基盤は、諸国の受領を歴任することによって得た財力であった。なお頼光は平安京内の一条大路南に邸宅を構えていたが、ここに藤原道綱を婿に迎えて同居したことがある。彼の武士としての面では、後世の四天王（渡辺綱、坂田金時、碓井貞光、卜部季武）の故事や酒吞童子の話などによって喧伝されたが、実際にはあまりみるべきものがない。しかし、996年（長徳2）の藤原伊周・隆家兄弟の左遷のとき護衛の任務を帯びて伺候した事実や、一条朝の人材輩出のなかで武士として彼の名があげてあることなどから、当時すでに貴族に侍う武士として認識されていたとみなしてよい。

【参考3】藤原保昌について（野口実氏執筆・『国史大辞典』吉川弘文館、JK版）

ふじわらのやすまさ（958-1036）

平安時代中期の中級貴族。南家武智麻呂流。致忠の子。母は元明親王の女。天徳二年（九五八）生まれる。日向・大和・丹後などの国守や左馬頭などの京官を歴任。藤原道長・頼通に家司として仕え、寛弘八年（一〇一一）八月、従四位下に叙された（『御堂関白記』『小右記』）。兵家の出身ではないが武勇にすぐれ、『今昔物語集』二五の強盗袴垂（はかまだれ）を恐れさせた説話は有名。歌も詠み、音楽の嗜みもあった。和泉式部の夫としても知られる。長元九年（一〇三六）九月、七十九歳で没。

【参考4】佐竹昭広氏『酒吞童子異聞』岩波書店、1992（初出1977）

「捨て童子譚 伊吹童子と酒吞童子（二）」

不思議な誕生をした子どもが深山に捨てられ、山の動物に守護されつつたくましく成人し、威力を世に振るうというモチーフは、中世口承文芸の典型的な一類型であった。この類型を、山中異常誕生譚「捨て童子」型と命名することができよう。伊吹童子、役行者、武蔵坊弁慶、平井保昌、かれらはおしなべて山中の「捨て童子」だったと言える。

伊吹山中の「捨て童子」は、後の酒吞童子である。シュテン童子の前身を「捨て童子」だったとするお伽草子『伊吹童子』は、シュテン童子なる者の原像をはからずも露呈しているかのようだ。

《中略》

しかし、以上はあくまで原義の問題である。「捨て童子」という原義は、時の経過とともに忘れられ、語形もくずれてシュテン童子と転訛し、「酒吞童子」の意味に付会された。シュテン童子の由来を、大酒によって説明した前引の諸例は、この主人公に対する新しい意味づけが、おおむね完了したことをあらわしている。

【参考5】高橋昌明氏『酒呑童子の誕生 もうひとつの日本文化』中央公論社、1992

「四塚祭の一こま」(第一章・三)

四角四塚祭は、天下に災異疫れいある時催され、下って応永二八年(一四二一)、宝徳二年(一四五〇)の疫病の祭にも実施された。後者は「幣料御訪都合四千疋、武家より下行せらると云々」とあり、奉行である職事(五位蔵人)広橋綱光のほか、武家奉行として飯尾為種の名もみえ、費用武家持ちの朝廷・幕府共催だったらしい(『康富記』同年五月二日条)。

以上によって、大江山が古代・中世を通じ「鬼気」のより来る場所として、同時にその侵入をさえぎり、都を頂点とする日本国の秩序や安寧・清浄を確保する境界として、ながく都人に観念されていたことが、明らかになった。そして、漆黒の闇中の一連の呪的行為こそ、モノノケのモノを、見えない霊的存在から、形象化され実体感のあるオニ(大江の鬼神)へと転化させた、もっとも基本的な契機だったと思う。この種の祭儀は、疫病発生の原因を示し、それを操作・追却する必要から、対象の実在化・可視化を求めずには、おかないからである。

酒呑童子は、この大江山の鬼神の上に、さまざまなイメージがおり重なった結果に違いない。

「酒呑童子の原像を求めて」(第一章・四)

「正暦年中」と、事件の発端の年を具体的に記すのは、中世の諸本では最古の『大江山絵詞』のみである。そして、「都鄙の貴賤をうしなひ遠近の男女をほろぼす……鬼王の所行」は、疫鬼のそれとみるのが自然だろう。となれば、この説話の形成にあたり、正暦五年(九九四)の疫病大流行の記憶が、なんらかの形で反映している可能性が考えられる。《中略》

瘡瘡は西からという常識に加え、疫病が現に九州から流行してきた以上、安倍清明ならずとも、侵入方向を山陽道とみなし、それが「帝都より西北にあたりて大江山といふ山有、かの所にすむ鬼王の所行なり」と跳躍することはありうることである。なおこの年、神祇官・陰陽寮の官人らに、疫病はいずれの神の祟りかと問うたり、安倍清明の答申によって仁王経を講読したり、という事実は確かにある(『本朝世紀』正暦五年五月二日・七日条)。《中略》

こうして酒呑童子の原像が、疫神、具体的には瘡瘡をはやらせる瘡瘡神だった、という仮説が浮上する。

【参考6】小松和彦氏の分析

「怪物退治と異類婚姻-『御伽草子』の構造分析」(『神々の精神史』福武書店、1992〈初出1978〉)

申し子か、異類婚姻か、という相異はあるにせよ(この相異は、物語の生成過程の違いに関係しているように思われる)、英雄もまた、酒呑童子と同様、異常成長(異類婚姻・申し子)によってこの世に生をうける。だが、鬼になるのではなく、社会のプラスとなる方向で成長したために英雄となる、といえるであろう。したがって、英雄もその敵対者である怪物も、元を正せば同じ存在なのであると考えて決して誤りではない。英雄とその敵対者である怪物は、同じ根から生まれた異なる枝、相対立する同族といえるであろう。私が頼光一党は彼らの同族である酒呑童子たちを退治している、と述べたのは、このような意味からである。英雄は、彼の出自、彼の過去、もう一つの彼の否定として、鬼などの怪物を退治する。退治することによって社会に迎えられ、英雄となるのである。

「酒呑童子の首-中世王権説話における「外部」の象徴化」(『酒呑童子の首』せりか書房、1997)

いずれにしても、酒呑童子の首や大嶽丸の首、那須野の狐の遺骸は、王権を脅かした「外部」の象徴であった。王権はこの「外部」を捕捉し、それを「中心」に運び込んで独占したのである。「外部」はいまや王権の手中にあった。「外部」は「中心」に回収され、「中心」に秘匿されねばならない。いや、上野千鶴子の言に従っていえば、「外部」としての鬼の首が帝や院の手中に入ったとき、その王権が超越性を持った「中心」として成立(再構築)されたというべきであろう。

【参考7】美濃部重克氏『まつろわぬものの時空 酒呑童子絵を読む』三弥井書店、2009

この始原的なイメージの中で重要なものの一つが〈飛ぶ首〉であり、いま一つは〈瞑らぬ眼〉である。〈瞑らぬ眼〉は〈王〉によって殺された〈悪王〉の敵愾心が死してもなお生き続けることを象徴的に表現したものに他ならない。香取本『大江山絵詞』では斬られた酒呑童子の首は宙を飛び源頼光の兜に喰らいつく。首は生きているのである。源頼光は「眼をくじれ」と命じ、渡辺綱と坂田金時が刀を抜いて左右の眼を抉る。それによって酒呑童子は死ぬ。ところが絵巻では大路渡しをされる酒呑童子の首は眼を見開いている。いったん殺されたはずの〈悪王〉は強い生命力をもって生き続けており、さらに世を乱す機会を窺っているのである。災厄を回避するためには首を封じ込めるしかない。香取本『大江山絵詞』では酒呑童子の首は宇治平等院の宝蔵に納められたとする。それは封神の行為であり、神社を作って怨霊を祀ることで祟りの害悪を祈願成就の善恵に転じることを祈る呪術的かつ宗教的側面からの社会的行為である。酒呑童子の首を祀る山城国と丹波国の境の地である大江山の首塚は酒呑童子の威力を封じ込め、それを境界守護の力に転じようとしたものに他ならない。

【資料1】『古今和歌集序聞書三流抄』

ニツニハ、武キモノ、フ・鬼神ニ至ルマデモ哥ニハ心ヲ和グルニ依テ、大ニ和グル哥ト云。《中略》

又問、目ニ見ヘヌ鬼神ヲモ哀レト思ハスルト云義、如何。

答云、鬼神、必、哥ニハ愛ヅルガ故ニ、如此云也。

又問、何ヲ以テ鬼神ノ哥ヲ愛ヅルト云哉。

答云、鬼神ノ哥ヲ愛ヅル事、日本紀ニ見ヘタリ。天智天皇ノ御時、藤原千方將軍ト云人アリ。此人、伊賀・伊勢兩國ヲ吾儘ニシテ天皇ニ不レ隨ハ。仍テ時ノ將軍ヲ差遣ハシテ是ヲ責ケレドモ不レ叶ハ。彼千方ハ四人ノ鬼ヲ仕フ。所謂、風鬼・水鬼・金鬼・一鬼ト云。《中略》然ル間、責ル事不レ及レカニ。此時、紀朝雄申納言ヲ大將トシテ千方ヲ責レドモ不レ叶。朝雄思ヘラク、鬼神ハ極テ心直ナル者也。サレバ千方ガ梟惡ヲ真ト思フテ王命ヲ背ケリ。去バ其心ヲ知セント思ヒ一首ノ哥ヲ讀テ、

土モ木モワガ大君ノ国ナレバ何クカ鬼ノ宿ト定メン

其時鬼トモ千方ガ梟惡ヲ悟テ捨去リヌ。其時、千方ヲバ金淵城ヘ追ヒ籠テ打畢。是、鬼ノ哥ニ愛ル証拠也。

【資料2】延慶本『平家物語』第二中(卷四)廿八「頼政又ヘ射ル事 付三位叙セシ事」

抑源三位頼政ト申ハ、摂津守頼光ニ五代、三河守頼綱ノ孫、兵庫守仲政ガ子ナリ。保元ノ合戦ニ御

方ニテ先ヲ懸タリシカドモ、サセル賞ニモ不_レ預_ラ。又平治ノ逆乱ニモ、親類ヲ捨テ參ジタリシカドモ、恩賞是疎也。大内守護ニテ年久ク有シカ共、昇殿ヲモ許サレズ。《中略・和歌による昇進》
 此人ノ一期ノ高名トオボシキ事ニハ、仁平ノ比ヲヒ近衛院御在位ノ時、主上夜ナ夜ナヲビヘタマギラセ給フ事アリケリ。可_レ然ル有驗ノ高僧貴僧ニ仰テ、大法秘法ヲ修セラレケレドモ、ソノシルシ無シ。御惱ハ丑ノ剋バカリニテ有ケルニ、東三条ノ森ノ方ヨリ黒雲一ムラ立来テ、御殿ノ上ニ覆ヘバ、主上必ヲビヘサセ給ケリ。依_レ之公卿僉議アリ。「去ル寛治ノ比ヲヒ、堀河ノ天皇御在位ノ時、如_レク然、主上ヲビヘサセ給フ事アリ。其時ノ將軍、義家ノ朝臣、南殿ノ大床ニ候ハレケルガ、メイケンズル事三度ノ後、高声ニ『前ノ陸奥ノ守、源ノ義家』ト、高ラカニ名乗ラレタリケレバ、御惱怠ラセ給ケリ。然レバ、先例ニ任セテ、武士ニ仰テ警固アルベシ」トテ、源平両家ノ中ヲ撰セラレケルニ、此頼政ゾエラビ出サレタル。其時ハ兵庫頭トゾ申ケル。頼政申サレケルハ「昔ヨリ朝家ニ武士ヲ置ルハ事、逆叛ノ者ノヲ退ケ、違勅ノ者ヲ亡サンガ為也。『日ニモミエヌ変化ノ者仕レ』ト仰下サル、事未_レ承_レ及」トハ申サレナガラ、勅宣ナレバ召ニ応ジテ参内ス。憑切タル郎等、遠江ノ国ノ住人井ノ早太ニ母衣ノ風切り作ダル矢負ハセテ、只一人ゾ具シタリケル。我身ハ二重ノ狩衣ニ山鳥ノ尾ヲ以テ作ダリケルトガリ矢ニ、重藤ノ弓ニ取り具シテ、南殿ノ大床ニ祇候ス。《中略》乍_レ去矢取テツガヒ、「南無八幡大菩薩」ト心中ニ祈念シテ、能引テヒヤウド放ツ。手ゴタヘシテ、ハタト中ル。「得タリ、ヨウ」ト、矢叫ヲコソシタリケレ。落ル所ヲ井ノ早太ツトヨリ、取テ押ヘテツバケサマニ九刀ゾ刺タリケル。其後上下手々ニ火ヲ燃シテミ給ヘバ、頭ヲハ猿、ムクロハ狸キ、尾ハクチナハ、手足ハ虎、ナク声ヌヘニゾ似タリケル。オソロシナドハオロカナリ。主上、御感ノアマリニ「師子王」ト云フ御劍ヲ下サセ給フ。

【資料3】『梁塵秘抄』卷第二「法文歌」

41 南天竺^{なんてんぢく}の鉄塔^{てつた}を竜樹^{りゆうじゆ}や大士^{だいじ}の開かずは 実^{まこと}の御法^{みのり}をいかにして 未^{ひろ}の世までぞ弘めまし
 42 竜樹^{りゆうじゆ}菩薩^{ぼさつ}はあはれなり、南天竺^{なんてんぢく}の鉄塔^{てつた}を 扉^{とぼ}を開きて秘密教^{ひみつぎょう}を 金剛薩埵^{こんがうさだ}に受けたまふ

【資料4】『溪嵐拾葉集』「四箇大秘法〈法花 尊勝／佛眼 金輪〉」

佛告言^フ。我乘内證智^ニ妄見^ハ非^ニ境界^ニ。我滅度後於^ニ南天竺^ニ有^ニ大徳^ノ比丘^ニ。名^ヲ龍樹菩薩^ト。為^レ人説^ス。我乘^ニ。能^ク有^ル無見^ニ。證^ニ得^ル歡喜^ノ地^ニ。文龍樹菩薩正^ク受^テ如来記莖^ヲ給事。此文分明也。仍如来遺屬^ニ不^レ違。龍猛大士開^キ南天鐵塔^ヲ。流^シ通^ス眞言教^ヲ給。若然^ク鐵塔^ト云^フ在世^ニ寶塔^ニ不^レ違也。其故法花^ノ如来内證也。又法花^ノ實^ニ義^ヲ以^テ寶塔^ヲ顯^ス之。楞伽經中^ニ我乘内證智ト云モ法花^ノ寶塔^ヲ可^ク指。仍一致^ニ習無^ク相違^ニ歟。《中略》鐵塔者。我等^ノ心藏也。一切衆生妄想戲論^ノ心法^ヲ打開^テ令^テ安住^ス。法界妙理鐵塔^ヲ開^キ習也。是三昧流最極^ノ秘傳也。口傳云々。

【資料5】『千学集抜粹』

一、都東山に珠天童子^{しゆてんどうし}そ住ける、院宣によつて宝生^{ほうせい}是を退治す、此刀大裏におさめたてまつる、これを宝生の懐太刀といふ

一、胤宗、在京、淨山と称す、御捐館年四十五、法照院殿と申、実に正和元年壬子三月廿八日也、御子三人、長子貞胤、二男八世座主覚源、外女子一人、胤宗在京の日、殿上の女房に契て、遂に是を盗出さんとはかりにける、此事内に聞えて、彼女房は大裏にて失ハれける、その追福のためにとて、阿弥陀七体、千葉の庄の内にたて給ふ也

一、妙見納物とて、火取、水取、玉、牛王、一條院の薄墨の御証文、《中略》頼朝の納め給ふ白絲鎧甲、御多羅枝鴉羽征矢、三尺八寸劍、広光作也、蛇巻きしてつらむけ八即死す、宝生懐太刀、即珠天童子を打し刀也、二尺七寸、菖蒲つくり也、良文よりして納物とも、皆秘事とす也、

【資料6】『しゆてん童子』上巻（慶應義塾大学蔵本）

ほうしやうのおひには、からかねと申て、むらさきいとおとしのよろひに、おなしけの、三まいかふとをいれ／太刀は、ひせんのくにの住人、すけひらといふかちか、三年、しやうしん、けつさいして、七重に、しめをはり、きたい出せるつるぎ、くわいけんと、かうして、ひそうの太刀なり／あるとき、しんしう、とかくし山にて、へんけのものをしたかへしも、このけんとそ、聞えし

【資料7】『大江山酒典童子』巻四（麻生太賀吉氏蔵本）

保昌は、むらさきのかうけつの、ひたゝれ、まつかけといふ、からあやをとしのよろひ、懐劍といふ、重代の長刀を太刀にこしらへ、長つかにし、馬の尾をもつて、ねたまきにまひたる太刀をそ、はかれける

【資料8】真名本『曾我物語』巻二

この若君は只一人荒血山の奥に捨てられて、彼方此方へ蚊はひあり行き給へども、誰かは「げに」と助くべき。されどもしかるべき仏神三宝の御計ひにてやありける、さしも怖し気なる禽とりけだもの 獣これを犯さず、ここにまた比叡山の麓に狩師れふしあり。《中略》若君を昇かき懐き奉て壇ほにかの小屋に立ち返りつつ、賞もてなし遵がしき奉る程に、若君御成人の間、武略の心武くして弓馬の芸、人に勝れ給へり。その名天下に聞えしかば、徳を顕して帝の御堅めとならせ給ふ。丹波守保昌と聞えしはかの人の御事なり。

【資料9】『檜垣姫集』（一類本）八番

虎の皮の尻鞆を題にて肥後の守の詠ませしに
海へとてゆくみなとらのかはのしりさやけからぬは波のにごすか

【資料10】『夫木和歌抄』巻第二十七 雑部九「虎」

12863 ものゝふのさけはく太刀のしりさやの 虎のおふみておそろしのよや 権僧正公朝

12864 ものゝふのたちしりさやのとらのおは 此の国にてもふまはおそろし 同

【資料11】『建武年間記』（群書類従本）

武者所輩可_レ存知_レ事

- 一 金銀装束。太刀刀鞍。細々不_レ可_レ用。《中略》
- 一 唐皮尻鞆切付等同断（イ前）

建武元年五月七日

大番條々建武二三一

- 一 鎧直垂已下武具事。

《前略》又金銀装束太刀。唐皮尻鞆。同可_レ停_レ止_レ之。可_レ用_レ疎品。

【資料12】『源平闘諍録』巻五・三「妙見大菩薩の本地の事」

然^{サテ}妙見大菩薩は、良文より忠頼に渡りたまひ、嫡々相ひ伝へて常胤に至りては七代なり」と申しければ、右兵衛佐此れを聞いて、「実^{まこと}に目出たく覚え候ふ。然らば聊^{いささか}頼朝が許へも渡し奉らんと欲ふ。云何^{いか}が有るべきや」。千葉介答へて申しけるは、「此の妙見大菩薩は余の仏神にも似ず、天照大神の三種の神器の、国王と同じく居たまひてこそ、代々の御門を護りたまふが如し。此の妙見大菩薩も、将門より^{このかた}以来嫡々相ひ伝はり、寢殿の内に安置し奉りて、未だ別家へ移し奉らず。物恠^{あや}しき不祥出で来らんときは、宮殿の内騒動して化異を示し、示現し、氏子を護る靈神なり。一族^た為りといへども本躰は永く末子の許へは渡られず。何^{いか}に況んや、他人においてをや。詮^{いは}ずる所、常胤、君の御方へ参り向かつて仕へたるを、偏^{ひとへ}に妙見大菩薩の御渡り有ると思食^{おぼしめ}さるべく候ふ」と申しければ、右兵衛佐頭を傾^{かつごう}けて渴仰を致したまひしかば、侍共身の毛堅つてぞ思ひける。

【使用本文】 編著者敬称略、既述文献は除く

片桐洋一『中世古今集注積書解題（二）』赤尾照文堂、1973

北原保雄・小川栄一『延慶本平家物語 本文編 上』勉誠社、1990

新問進一ほか校注『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』（新編日本古典文学全集 56）小学館、2000

『大正新修大蔵経 第76巻 續諸宗部』大蔵出版、1931

千葉市立郷土博物館編『妙見信仰調査報告書 二』千葉市、1993

横山重・松本隆信編『室町時代物語大成 第三』角川書店、1975

青木晃・池田敬子・北川忠彦編『真名本曾我物語 1』（東洋文庫 468）平凡社、1987

西丸妙子『私家集全積叢書 9 檜垣媽集全積』風間書房、1990

宮内庁書陵部編『夫木和歌抄 四』（圖書寮叢刊）1987

『群書類従』正編第二十五輯「雑部」

福田豊彦・服部幸造『源平闘諍録 下 坂東で生まれた平家物語』（講談社学術文庫）2000

令和4年度 千葉市・千葉大学公開市民講座

CHIBA UNIVERSITY
千葉開創 Road to 900 Since 1874

酒天童子の物語と千葉氏

～逸翁本『大江山絵詞』をめぐって～

【講演1】

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭

千葉大学大学院人文科学研究院 准教授 久保 勇

▼スライド2

スライド1▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

- 一 逸翁本『大江山絵詞』概説
- 二 「酒吞童子の物語」の伝播
「講談社の絵本」／「日本昔噺」／神田明神祭礼
渋川版御伽文庫／『前太平記』
- 三 研究史の輪郭と問題の所在
佐竹昭広氏『酒吞童子異聞』
高橋昌明氏『酒吞童子の誕生』
小松和彦氏『神々の精神史』『酒吞童子の首』
美濃部重克氏『酒吞童子絵を読む』
- 四 詞書から二、三の考察
 - ① 酒天童子の輪郭
 - ② へ異類退治の武士
 - ③ 物語とへ仏法
 - ④ 千葉氏との関連―保昌の存在

2

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

一 逸翁本『大江山絵詞』概説

○「酒吞童子」の物語

〈大江山系〉逸翁本『大江山絵詞』↓最古

〈伊吹山系〉サントリ―美術館蔵本

（古法眼本・狩野元信筆）

○逸翁本『大江山絵詞』の制作

比叡山延暦寺の関与

鎌倉の地で制作された可能性

○源頼光と四天王

○藤原保昌



多聞天（奈良国立博物館）



増長天（奈良国立博物館）

奈良国立博物館 収蔵品データベース
多聞天立像（画像番号H0158890）
<https://www.nara-museum.go.jp/collection/735-0.html>
増長天立像（画像番号00001661）
<https://www.nara-museum.go.jp/collection/1114-0.html>

3

▼スライド4

スライド3▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

二 「酒吞童子の物語」の伝播



大日本雄弁会講談社 発行
昭和27年 絵：米内穂豊／文：松村武雄

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1169147/1/1>

「大江山」について 文学博士 松村武雄
この物語は、京都の羅生門に、夜毎に現れて人々を悩ます鬼賊の活動と、これを退治しようとする源頼光たちの勇ましくも、けなげな活動がうまく織りこまれて、読む人の心に、ころよよい興奮を与えます。さらにまた、世の中の平和を乱す邪悪な行いに対して、それを取り除こうとする強い正義心の勝利が、読む人に明るい希望と喜びを与えてくれます。こうした点が、この物語のいいところで、お子さん方にも、この点をわかつていただきたいと思います。

4

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）



講談社の絵本72『大江山』1952年 絵：米内穂豊／文：松村武雄

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1169147/1/1>

5

▼スライド6

スライド5▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）



講談社の絵本72『大江山』1952年 絵：米内穂豊／文：松村武雄

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1169147/1/1>

6

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）



講談社の絵本72『大江山』1952年 絵：米内穂豊／文：松村武雄

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/ja/pd4/1169147/1/1>

7

▼スライド2

スライド7▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

金太郎について
 大きくなって、都へ上り、頼光につかえる金太郎は、もう山の中の金太郎ではありません。まったくそれからの活躍ぶりは、足柄山の時代から見ても、精彩を欠くようです。自然の子は、やっぱり、自然の中がふさわしかったのでしょう。また、たとえ活躍があったとしても、それは坂田の金時の活躍であって、金太郎の一番愉快な、心を打つ舞台は、足柄山に付きいているのであります。

※金太郎＝坂田公時→頼光四天王の一人

千葉省三



昭和24年 絵：米内穂豊／文：千葉省三

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/ja/pd2/1169140/1/1>

二 「酒吞童子の物語」の伝播

8

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）



講談社の絵本6『金太郎』1949年 絵：米内穂豊／文：千葉省三

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/ja/pdf/1169140/1/1>

9

▼スライド10

スライド9▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）



講談社の絵本6『金太郎』1949年 絵：米内穂豊／文：千葉省三

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/ja/pdf/1169140/1/1>

10

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）



いわやの ちびは ちびの
たいしやうが けらいを あつめ
て さかもちを して いました
金助は たいしやうの ままに
でて 二つたくしは あしからやま
から また あかおの こども
です。まさかこの まいと いう
かどを あねに みけまします。
と いって、かもしろそうにま
いはじめました。みんなは こと
をたいて ばねはやしました。

講談社の絵本6『金太郎』1949年 絵：米内穂豊／文：千葉省三

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/h/rid/1169140/1/1>

11

▼スライド 12

スライド 11 ▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）



二 「酒吞童子の物語」の伝播

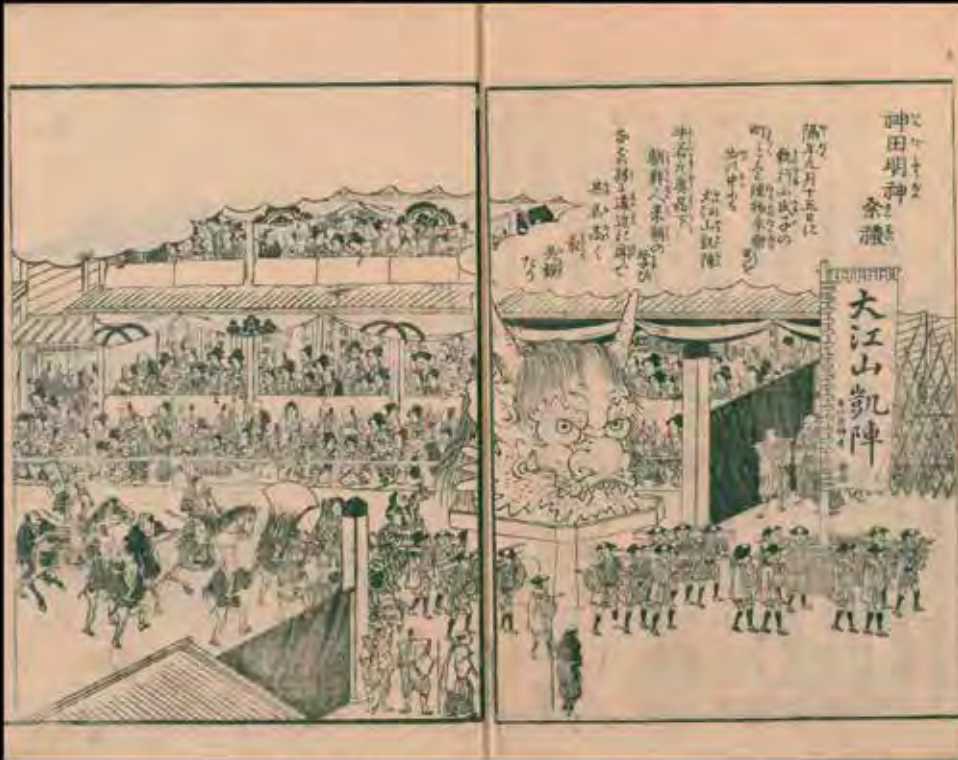
小波曰、大江山の酒吞童子と云つても、お話では鬼で
すが、元より此世に鬼の居さうな筈はありませんから、
是はほんの譬喩で、実は鬼の様におそろしい大盗賊が、
自分を大勢連れて、其山に立て籠つて居たのを、頼光
が四天王や保昌と一所に、お上の御命を受けて、見事
に退治したと云ふまでの事、お話はお話、事実、諸君
一所にしてはいけませんよ。

巖谷小波『日本昔噺 第六編』博文館、明治28年

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/h/rid/191959/1/1>

12

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭 (久保 勇)



『江戸名所図会』第14「神田明神祭礼」天保5-7年 [1834-1836]

国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/pid/2293297/1/8>

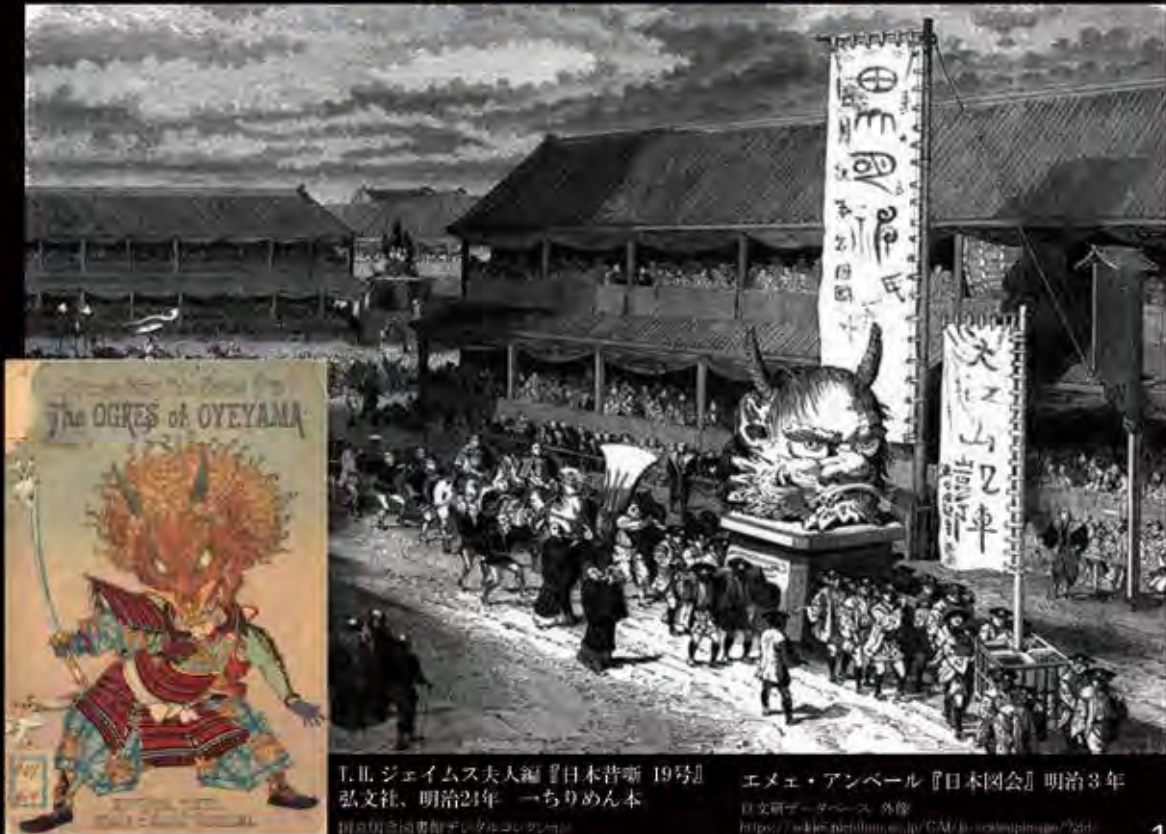
二 「酒吞童子の物語」の伝播

13

▼スライド 14

スライド 13 ▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭 (久保 勇)



T. H. ジェイムス夫人編『日本昔噺 19号』弘文社、明治24年 一ちりめん本
国立国会図書館デジタルコレクション
<http://dl.ndl.go.jp/pid/1166953/1/>

エメエ・アンペール『日本図会』明治3年
日文明字ターベース 外像
https://books.google.co.jp/CAM/bs/books?id=72dGAY08109&book_group=00012629&hl=fr&id=5102&pg=109&dq=oniguma

14

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）



逸翁本『大江山絵詞』下巻・絵第6段

一平成19年〔2007〕に復活した「大江山凱陣」

小松茂美編『土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』
〔既刊本絵巻大成19〕中央公論社、1984

神田屋公式ブログ 大江山凱陣 <https://kandanizuri.jp/entry/997>

二 「酒吞童子の物語」の伝播

15

▼スライド 16

スライド 15 ▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）



渋川版『御伽草子』享保年間（国文学研究資料館）

国文学研究資料館（請求番号：96-814-1-73）729P/CC-BY-SA 4.0

二 「酒吞童子の物語」の伝播

16

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

二 「酒吞童子」の物語」の伝播



『前太平記』の「坂東武士」論は、荒唐無稽な作り話というのではなく、中世に形作られた坂東武士論の再話であった。（鈴木氏）

『前太平記』巻20、17世紀後半（国文学研究資料館）

国文学研究資料館蔵 複製権フリー（CC BY-SA 4.0）

17

▼スライド 18

スライド 17 ▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

三 研究史の輪郭と問題の所在

○佐竹昭広氏『酒天童子異聞』一九七七

* シュテン童子の原像

「捨て童子」



「酒吞童子」

○高橋昌明氏『酒吞童子誕生』一九九二

* 都の「四角四塚祭」

「大江山」 〓 〈境界〉

* 疫神（疱瘡神）としての存在

酒吞童子原像



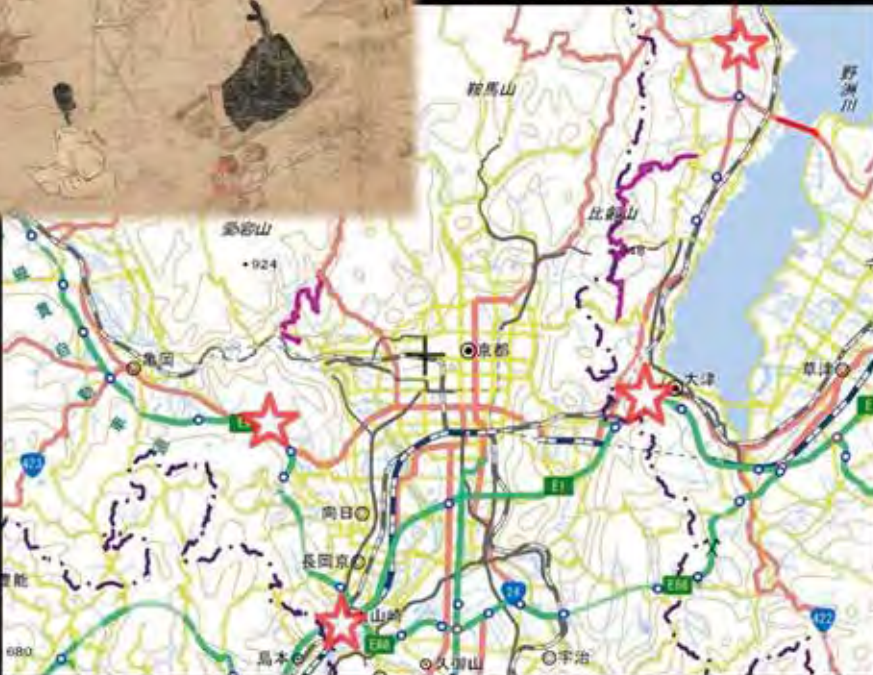
18

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

病身身代わりの祈祷を行う清明
『不動利益縁起絵巻』南北朝期
14世紀（東京国立博物館蔵）
東京国立博物館 画像検索(画像番号C00009529)
<https://www.nhk.or.jp/museum/kuon/research/show/C00009529>

三 研究史の輪郭と問題の所在

「四角四堺祭」（しかくしかいのまつり）



東⇨逢坂 西⇨大枝
南⇨山崎 北⇨和邇
(龍華)

19

(国土地理院地図(電子国土Web) <https://map.gsi.go.jp/F11/35/019875/135.731964/?kbn=c0&de=red&sp=1&sv=c1&tr=0&bl=0&ob=0&bus=1>)

▼スライド 20

スライド 19 ▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

○小松和彦氏『酒呑童子の首』一九九七
*中世王権説話における「外部」の象徴化
酒呑童子の首(珠)
←
王権の中心へ

三 研究史の輪郭と問題の所在

○小松和彦氏『神々の精神史』一九七八
*英雄と怪物は同根の異なる存在
異常成長への着目




内部——天皇(二条帝)——内裏(都)——王土(都)
外部——鬼王(酒呑童子)——鬼が城——鬼隠しの里



19

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）



大路渡しされる首（下巻・絵第6段）
小野及重編『上柳林草紙 天狗草紙 大江山絵詞』
(従日本絵巻大成19)甲斐堂編刊、1984



眼をえぐりとどめを刺される（下巻・絵第6段）

酒呑童子絵を読む



三 研究史の輪郭と問題の所在

○美濃部重克氏『まつろわぬものの時空

酒呑童子絵を読む』二〇〇九

*酒呑童子の〈暝らぬ眼〉
世を乱す機会を窺う首

▼スライド22

スライド21▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

三 研究史の輪郭と問題の所在

○問題の所在

・近現代における「酒天童子の物語」

↓怪物⇨鬼を退治する武士の活躍劇
(勇氣、智恵、腕力：)

・「酒天童子の物語」とは何か。

↓〈境界〉を往還し「災い」を退ける物語
(例・節分の「鬼は外、福は内」)

↓王権の秩序を回復する物語

・酒天童子とはいかなる存在か。

↓異常に成長した異類(「捨て童子」)
↓厄災(疫神)

↓武士(保昌)と同根で異なる存在

【資料8】

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

四 詞書から二、三の考察

① 酒天童子の輪郭 勅命に従う存在

↓【資料1】 千方説話（島内景二氏）

爰に閑院の右大将実見の卿、其の時、中納言にておはしけるが、申されけるは、「斯かる変化の者も、王土に跡を留めながら、争か天氣に従はざるべき。」（上・詞書第一段）

近江国かゞ山、大師房が領なりしを得たりしかば、然らばとて彼の山に住み替えてありし程に、桓武天皇、又勅使を立て宣旨を読まれしかば、王土にありながら、勅命さすがに背き難かりし上、天使来りて追ひ出せしかば、力無くして又、此の山を迷ひ出で、立ち宿るべき栖もなかりし事の口惜しさに、風に託し雲に乗りて、暫くは浮かれ侍りし程に、

（上・詞書第五段）

23

▼スライド24

スライド23▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

四 詞書から二、三の考察

② 〈異類退治〉の武士

↓【資料2】

「朝家に文武二道を定置るゝ事、文をもて万機の政務を執り、武を持ってば、諸国の乱逆を打ち鎮めんが為なり。速やかに致頼・頼信・維衡・保昌等を召されて、此の旨を仰せ含めらるべし」と定め申しければ、即ち四人の武士を召して此の由を仰す。各申されけるは、

「誠に弓箭の道には、偏に朝敵を平らげんが為也。夫れ、仰せを辞し申すに及ばず。五材四義に忠を尽くし、左車右馬の謀を巡らすべしと雖も、是は姿を見ざる天魔、声を聞かざる鬼神也。合戦を遂ぐる事、人力及び難き」由をぞ申しける。（上・詞書第一段）

【参考】黒川真道『訂正増補考古画譜』一九一〇
大江山絵詞 二卷（一名酒願童子双紙）《中略》
頼則曰 本社蔵二卷 巻標白茶地錦軸紫檀 無標題 書面筆者姓名不レ伝 詞盛衰記 平家物語の口記にて太平記よりはふるし 元信筆といへるものは 詞も近俗にて別本なり

24

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）



蓑を被った三人が鬼たちの居所をうがかう。（下巻・絵第4段）
→「隠れ蓑」=竜樹菩薩

小松茂美編『上巻絵草紙 天狗草紙 大江山絵詞』
（戦日本逢会大成19）中央公論社、1984

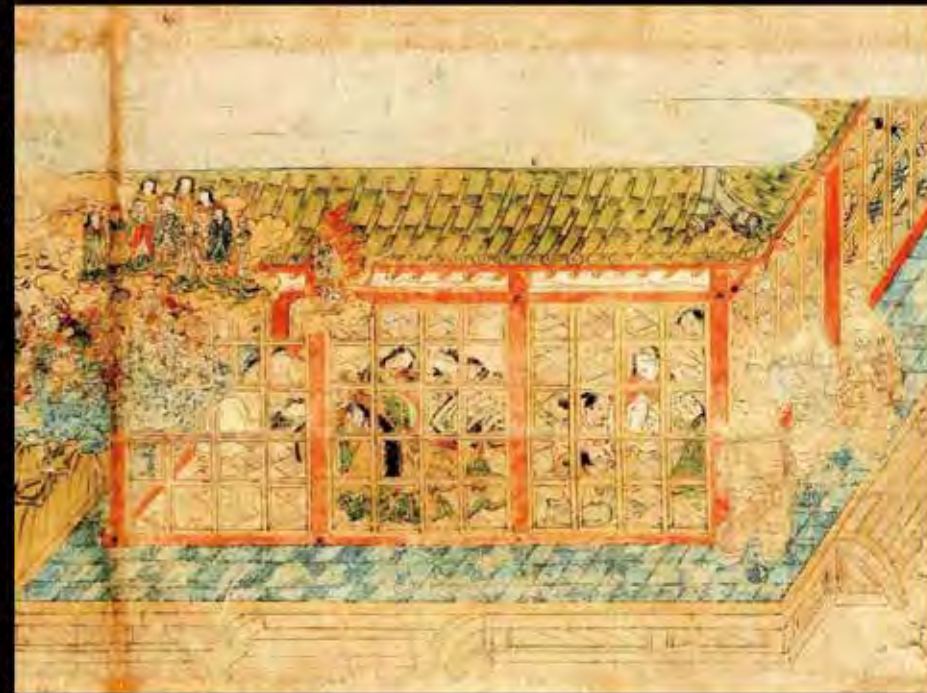
③ 四 詞書から二、三の考察
物語とへ仏法へ 蓑笠の三人と「籠」

25

▼スライド26

スライド25▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）



銅の籠を作て女房四口人こめおきたる中に、いと清けなる
児の、十四五ばかりなるが……

慈恵大師の弟子の法花読誦によって諸天来迎する（下巻・絵第4段）
→「法花ノ實ノ義」（『溪嵐拾葉集』）

小松茂美編『上巻絵草紙 天狗草紙 大江山絵詞』
（戦日本逢会大成19）中央公論社、1984

③ 四 詞書から二、三の考察
物語とへ仏法へ 蓑笠の三人と「籠」

26

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭 (久保 勇)



籠に囚われた「天竺・震旦」の人々を蓑を被った僧たちがうがかう。
(下巻・絵第5段-2)
→「天竺・震旦・本朝」= 〈仏法〉の弘通

小松茂美編『土曜草紙 天竺草紙 大江山絵詞』
(続日本絵巻大成19) 中央公論社、1984

四 詞書から二、三の考察
③物語と〈仏法〉
↳蓑笠の三人と「籠」

▼スライド28

スライド27▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭 (久保 勇)

破られた直後の「鐵石の室」
(下巻・絵第6段)



小松茂美編『土曜草紙 天竺草紙 大江山絵詞』
(続日本絵巻大成19) 中央公論社、1984

四 詞書から二、三の考察
③物語と〈仏法〉
↳蓑笠の三人と「籠」
童子、**鐵石の室**を強く構へて、その中にぞ臥したりける。《中略》何にしても此の戸を開くべき様なかりけるに、老ひたる、少き二人の僧、「年来の行功只今なり。本尊界会、穴賢、本誓誤り給ふな」とて袈裟の下に印契結びて、暫く祈念し給へば、固く閉ぢたりつる鐵石、朝の露と消え、由々しく見えつる寢所は一時に破れにけり。

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

四 詞書から二、三の考察

③ 物語とへ仏法〉 葦笠の三人と「籠」

・ 龍樹菩薩の「隱身」

『今昔物語集』卷四・第二十四は「隱形の薬」を用い、『打聞集』十三、『古本説話集』下・六十三等があり、『宝物集』卷第一ではモノとしての「隱蓑」に関連して龍樹の「法」に触れる。

・ 別巻『詞書』

清明と申すは、**秘密真言の棟梁、竜樹菩薩の変化也。**昔は白道沙門とあらはれ、今者清明といふはかせに生まれたり。陰陽の秘術をあなたがちに執し被^レ思しかば、二度さすのみこと成りて、かゝる賢王の御代に仕へ給ふ也。

・ 【資料13】 竜樹菩薩の南天鐵塔譚

・ 【資料14】 比叡山・記家による「鐵塔」秘伝

「竜樹菩薩」「南天鐵塔開扉」（真言秘法）

+ 「法華宝塔」

|| 「一切衆生妄想戲論ノ心法ヲ打開」くこと。

29

▼スライド30

スライド29▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

四 詞書から二、三の考察

④ 千葉氏との関連―保昌の存在

・ 陽明文庫本

保昌は、赤地錦鎧直垂、むらさきすそ

ごの鎧に、くわがたうちたるかぶとをもたせて、たかうすべをの征矢おひて、ふしまきの弓づへにるき、白きひるまきの太刀に**虎皮のしんざ**や入てはき……



小松聖典編『上巻絵詞』天海歌謡
大江山絵詞『後日本繪傳』大改訂
甲斐公館社、1984

虎皮の尻鞆の太刀を佩く保昌（上巻・絵第6段）

【参考】『傍抄』中院通方、嘉祿二年（一一三六）
「尻鞆事」に「同四十二殿記曰。四位用「豹皮」。五位用「虎皮」云々とある。（仁安四年（一一六九）通親の日記）
【資料9】 【資料10】 「虎皮尻鞆」在地で武威を振るう象徴
【資料11】 建武二年（一一三五）に禁止された「虎皮尻鞆」

30

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

四 詞書から二、三の考察

④ 千葉氏との関連―保昌の存在

・『千学集抜粹』の保昌「懐太刀」

↓【資料6・7】「くわいけん」「懐劔」

とあり、〈大江山系〉の後出版に認められる伝承。

↓享徳元年（一四五二）奥書の『鍛冶名字

考』に備前の鍛冶助平について「一条院

御宇永延年中ノ作者也 保昌フトコロ太

刀此作也」とある。（鈴木彰氏）

【参考】

「これ（久保注・千葉氏本宗家）に対し、血統の上で嫡流とは言えない下総千葉氏は、宮中に伝わった保昌の太刀を胤宗が入手したという宝剣説話を作り出し、その正統性を主張したのではないだろうか。」（外山信司氏）

「もうひとつの洒天童子の物語は、千葉氏本宗家の逸翁本

「大江山絵詞」の洒天童子物語を継承できなかった馬加千葉氏の正統性を支証するために、一五世紀中葉以降に原氏が主体となって創作したものと考えられる。」（鈴木哲雄氏）

31

▼スライド32

スライド31▲

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭

○おわりに

・「洒天童子の物語」

今日まで長い時間、多くの人々に受容され、多様な作品に分化し、さまざまな読まれ方をしてきた〈物語〉。

・逸翁本『大江山絵詞』

現存する「洒天童子の物語」で最古であり、〈物語〉が成立した当初に近い状況（制作の意図）を考える上で重要な位置を占める。

※「制作の意図」と「受容」とが一致しない可能性。

【参考】『後三年合戦絵巻』源義家の描かれ方とその受容

32

逸翁本『大江山絵詞』の輪郭（久保 勇）

【参考文献】編著者五〇音順・敬称略

乾克己ほか編『日本伝奇伝説大事典』角川書店、一九八六

黒田日出男『歴史としての御伽草子』ベリかん社、一九九六

小松和彦『神々の精神史』福武書店、一九九二（初出一九七八）

小松和彦『酒吞童子の首』せりか書房、一九九七

小松茂美編『土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』（続日本絵巻大成19）

中央公論社、一九八四

佐竹昭広『酒吞童子異聞』岩波書店、一九九二（初出一九七七）

島内景二氏『御伽草子の精神史』ベリかん社、一九八八

鈴木彰『平家物語の展開と中世社会』汲古書院、二〇〇六

鈴木哲雄『酒天童子絵巻の謎「大江山絵詞」と坂東武士』岩波書店、二〇一九

高橋昌明『酒吞童子の誕生 もうひとつの日本文化』中央公論社、一九九二

一九九二

徳田和夫編『お伽草子事典』東京堂出版、二〇〇二

宮次男ほか編『角川絵巻物総覧』角川書店、一九九五

【論文】

井上知巳「お伽草子『酒吞童子』の挿絵と本文について―鬼退治を命じられる場面の登場人物を中心に―」『古典文学研究』一九九三・七

一九九三・七

久保勇「もの」とイメージの文化伝播に関する一考察―「虎皮の尻鞆」をめぐる―」池田忍編『「もの」とイメージを介した文化伝播に関する研究―日本中世の文学・絵巻から―』二〇一〇・三

外山信司「藤原保昌伝承と千葉氏」佐藤博信編『中世東国の社会と文化』岩田書院、二〇一六

文化』岩田書院、二〇一六

【事典等】

乾克己ほか編『日本伝奇伝説大事典』角川書店、一九八六

徳田和夫編『お伽草子事典』東京堂出版、二〇〇二

宮次男ほか編『角川絵巻物総覧』角川書店、一九九五

33

スライド 33 ▲

【講演2】

逸翁本『大江山絵詞』の伝来と千葉氏

鈴木 哲雄（都留文科大学教養学部特任教授）

講師紹介

鈴木 哲雄（都留文科大学教養学部特任教授）

鈴木先生は千葉県匝瑳市のご出身です。東京学芸大学大学院修士課程を修了され、埼玉県の春日部共栄高校、習志野市立習志野高校、千葉県立千葉高校などで教諭としてご勤務され、中央大学にて博士（史学）の学位を取得されました。その後、北海道教育大学札幌校助教授、教授を経て、都留文科大学教養学部教授となられ、現在は都留文科大学の特任教授としてお勤めなさっています。

ご専門は日本中世史および社会科学教育です。著書としましては『中世関東の内海世界』『香取文書と中世の東国』『動乱の東国史1 平将門と東国武士団』などがあります。本日のご講演に直接かわるものとしては、先ほど久保先生のご講演の中でもご紹介がありました、岩波書店から二〇一九年に刊行された『酒天童子絵巻の謎―「大江山絵詞」と坂東武士―』がご紹介します。

本日は「逸翁本『大江山絵詞』の伝来と千葉氏」という論題にてご講演をいただきます。それでは鈴木先生、どうぞよろしくお願いたします。

鈴木哲雄です。どうぞよろしくお願いたします。都留文科大学に勤めておりますが、住まいは習志野でして、もともと千葉県に生まれまして。今日は、外山先生から逸翁本『大江山絵詞』の伝来と千葉氏との関わりについて考えを話すようにとの機会を頂きましたので、お話しさせて頂きます。

早速ですが、私の配布資料は裏表6頁です。1から5頁までは、これからスライドで見せる記載事項と同じものですので、スライドの文字が見づらかったら資料をご覧ください。スライドにしました絵巻物の一部の出典は、このスライドに示しましたが、ご参照ください。なお、配布資料の最後の6頁目に系図がありますが、この系図はスライドにしないので、途中で見ていただけたらと思います。あと『大江山絵詞』をカラーコピーして絵巻物の形に複製したものを話の途中で見せたいと思います。

それではお話しに入ります。まず、次のスライドをご覧ください。皆さんは、朝ドラの『舞いあがれ!』をご覧になっておいでですか？ドラマの中で、主人公の舞ちゃんの部屋などに飾ってあるのがたまに見えますね。このスライドの凧も、五島のおばあちゃんが舞ちゃんにくれた凧と同じ、バラモン凧です。このスライドのバラモン凧は、以前に知り合いの方から頂いた本物の五島列島のバラモン凧です。写真を撮りスライドにしてみました。主題の酒天童子の話とどう関係するか。先ほどの久保先生のお話の中で、酒天童子の首が頼光の兜に食らいつく場面があり



ましたが、この場面がバラモン風のモチーフじゃないか、そんなことを思いつき私の話の枕にさせて頂きました。時間があれば、最後にもう一度、バラモン風に戻りたいと思います。

(1) 「大江山絵詞」(酒天童子絵巻)とは

本題に入ります。『大江山絵詞』は『酒天童子絵巻』ともいいますが、その内容は久保先生のお話しにありましたように、源頼光とその四天王による大江山の鬼退治についてのものです。絵巻物として残されているものには、大阪の逸翁美術館が所蔵する逸翁本(香取本とも)とサントリ―美術館が所蔵するサントリ―本(後北条氏本とも)があります。逸翁本は、もとは香取神宮の大宮司家が所蔵していたものでした。一方、

サントリ―本は、戦国時代に小田原北条氏が作らせたものであることがわかっています。久保先生のお話にあったように、室町時代から江戸時代に流布した頼光たちの鬼退治の話は、後北条氏本の系統のものです。他方、逸翁本は明治二〇年に香取神宮の旧大宮司家が、当時の伯爵の松浦家に売却してから初めて公になったもので、室町時代から戦国時代、江戸時代とほとんどその存在は知られていませんでした。それが昭和一三年に小林一三が購入します。小林一三(二八七三―一九五七)はご承知のように阪急や東宝グループ

の創始者で、宝塚歌劇団を創設したことも有名ですね。実は小林一三は宝塚の少女歌劇団をつくと早い時期に、大江山の鬼退治の劇を少女歌劇団の演目にしていきます。自ら脚本を書いています。そうした経緯もあって、小林一三は松浦家が売りに出した『大江山絵詞』を購入したようです。蛇足ですが、一三の雅号は「逸翁」で、彼が収集した美術工芸品などを収蔵・展示する施設が逸翁美術館です。逸翁美術館に所蔵されている『大江山絵詞』は、国の重要文化財になっております。

(2) 逸翁本『大江山絵詞』を読む

では、逸翁本『大江山絵詞』の内容(あらすじ)をかいつまんで見ていこうと思います。絵巻物としては上下2巻になっていますが、現状のものは錯簡が多いため、もとの絵巻物への復元案が示されています。復元案に従って絵巻物を見てまいります。まず上巻のほうから。

《上巻1・2段》

さて、ことの始まりは平安時代の中頃、一条天皇の時代のこと。正暦年中に都の貴族から人民に至るまで多くの老若男女が失踪する事件が起きます。都の内外の町や村は悲しみ泣く声に包まれます。朝廷はあの有名な陰陽師の安倍晴明に占いをさせるわけですね。その占いに基づいて、朝廷は帝都、都の西北の大江山の鬼王の仕業だと知り、源頼光と藤原保昌に追討を命ずるようになります。時は、藤原道長の全盛時代でした。命令を承った源頼光と藤原保昌は、自らの氏寺と氏神に必勝の祈禱をすることになります。源頼光は「八幡三所」(京都山崎の石清水八幡宮寺)と、酒天童子物語の元話ができる比叡山の日吉大社に参詣します。それから藤原保昌は「熊野三所」(和歌山県の熊野三山＝熊野権現)と大坂の住吉明神(住吉大社)で必勝祈願をします。朝廷は援軍として近国の武士数万騎を遣わそうとしますが、源頼光は正体不明の鬼退治には、「死も生も一所にと契りを深くする郎等」のみで行くとして、数万の騎馬を辞退します。結局、源頼光はその四天王の渡辺綱、坂田金時、平貞通、

平季武の五騎、藤原保昌は従者一人を従え、合わせて七騎で出立することになります。ちなみに、頼光四天王のうち、「平貞通」は逸翁本では「平忠道」と書き換えられています。逸翁本に「平忠道」とあることが今日のお話のポイントとなります。

スライド①をご覧ください。朝廷の内裏の紫宸殿の階下に控えた頼光と保昌。紫宸殿の緑の簾の奥に一条天皇がおいでになり、紫宸殿の廊(軒廊「こんろう」)に公卿が並んでいます。鬼王追討の宣旨を受ける場面です。スライドを拡大します(スライド②)。向かって右側が源頼光で、左が藤原保昌。頼光は金作(こがねづくり)の太刀をはき、従者が龍頭の兜を持っていますね。それに対して藤原保昌は、先ほど久保先生のお話にあった「虎皮の尻鞆(しりさや)」の太刀をはき、従者が鍬形の兜を持っています。逸翁本では、両将が丁寧に描き分けられています。

《上巻第3段》

長徳元年(九九五)十一月一日、帝都を出立した源頼光と藤原保昌の一行七騎は大江山へと向かいます。このスライド③は、内裏の門を出て、多分朱雀大路だと思っただけですが、朱雀大路を行進する場面です。先頭を行く二騎が、頼光と保昌ですが、太刀や家来の持つ兜は描き分けられていますね。都から大江山へ向かうルートは、次のスライド④に図示したように、朱雀大路を南に下って七条通を西に進んでいく道、旧山陰道で現在の山陰道でもあります。今もバス通りになっています。

大江山に向かっていく途中、洞窟に四人の客人が待っていました。頼光一行は怪しい者かと身構えて太刀を抜く姿勢を取りますが、客人の先頭の老翁が、いや待ってくれ、われわれは怪しい者ではない。あなた方を手助けしようと、御馳走を用意して待っていたんだといいます。御馳走の櫃の真ん中に壺が見えますね(スライド⑦)。これが山伏の持つ「死筒の酒」でした。後北条氏本などでは「神便鬼毒酒」と書かれている酒です。本当は洞窟の中なのですが、絵画表現上、洞窟は略されています。絵を拡大すると(スライド⑤)、老翁は前方に跪いて手を擦り合

わせ、つまり服従の礼をとっています。老翁の後ろには、老僧と若僧、そして山伏が控えています(スライド⑥)。

《上巻第4段》

老翁の提案で、頼光ら七騎は騎馬武者姿から山伏姿へと変身します。山伏姿は老翁らが用意したものでした。七騎の甲冑などは笈(おい)に入れ、背負ったのでした。そして、山伏姿の一行は、深山幽谷を踏み分けていきます。岩穴を抜けると、川辺で血の付いた衣服を洗う老女に出会います。老女は二百年ほど前に酒天童子にさらわれ、洗濯女にされたと言います。スライドを用意すればよかったですね、割愛してしまいました。老女から酒天童子の城への道や鬼城の様子などを聞きます。老女は、鬼城の門には「酒天童子」と書かれた扁額があると教えます。逸翁本では「しゅてん童子」は、「酒天童子」であることが確実です。

次のスライド⑧が、頼光一行が酒天童子の城、鬼城に着いた場面です。源頼光の指示で、山伏姿の渡辺綱が城内に入っていきます。綱は、城内の寝所の前まで行き、「もの申さん」と声を掛けます。すると簾を開けて酒天童子が姿を見せます(スライド⑨)。鬼ではなく、大きな童子の姿でした。酒天童子は笛の名手であり、笛を手にしていますね。顔つきは女性的な丸い顔ですね。定型化された童子の姿ではありますが、寝所の簾は、緑色で紫宸殿のものと同じです。紫宸殿の簾の奥には天皇が、鬼城の寝所の簾の奥には「酒天童子」がいたわけです。先ほど久保先生が対比的な話をされました。さて渡辺綱は出てきた酒天童子に対して、われわれは山伏で道に迷ってしまったので一晩泊めてほしいと乞います。すると酒天童子は良いといい、一行は門の際の廊に案内されることとなります。

《上巻第6段》

廊に案内されると、容顔美しい女房たちに銀の瓶子の酒や金の鉢に盛った肉などで接待されます。その肉が問題ですけど。頼光らの求めで、酒天童子も酒宴の場に現れます。酒天童子は頼光一行に血の酒を勧め、



頼光は持参した山伏の「死筒の酒」を酒天童子に勧めます。それがこのスライド⑩です。向かって左側に酒天童子がいます。右手に頼光と保昌、そして一行がおります。真ん中の瓶子の酒は赤く、ですから血の酒で、酒天童子の側が用意したもの。一方、紹興酒が入っているような大きな甕が、老翁らが用意した「死筒の酒」ですね。これを酒天童子に勧める。酔いに任せて酒天童子は自らの生い立ちを語ります。先ほど久保先生がお話しされた比叡山との関わりについての話です。この身の上話がとても面白いのですが、時間の関係で割愛します。「死筒の酒」に酔った酒天童子は寝所へと戻ります。

しばらくして、老翁と源頼光、藤原保昌の三人は、先ほど久保先生が隠れ蓑の話をしていましたが、蓑帽子をかぶって姿を消し、鬼城の城内を探索して歩きます（スライド⑪）。絵では、老翁と源頼光と藤原保昌の蓑帽子姿は色が薄く見えづらいですね。しかたがありません、姿を消しているのですから。城内の鬼たちのいる場所を確認しながら進むと、庭には人を酔に仕込んだ大桶が二つ三つとあり、死骸が散乱しています。これが酒天童子の城、鬼城の本当の姿なわけですね。庭を挟んで向かいの建物のところには、久保先生がお話しされていた唐人（天竺や震旦の人々たち）が牢に入れられています。鬼城の庭は、春夏秋冬の四季が見渡せる神仙境でした。ちよっ

と飛ばして、下巻の3段です。

《下巻3段》

頼光たちは家来が待つ廊に戻り、山伏姿から鎧兜の武者姿となって、鬼どもを征伐していきます。それが次のスライド⑫です。先ほどの容麗な女性たちは鬼だったわけですね。

《下巻4段》

ここには、寝所で寝ている酒天童子が描かれています。酔って寝る酒天童子は、真っ赤な顔の鬼の姿であり、都から攫ってきた女房たちに体をさすらせています（スライド⑬）。寝所は鉄石で覆われているのですが、老僧と若僧が祈念すると鉄石の扉は打ち破られ、寝所内があらわになるという場面です（スライド⑭）。源頼光一行は、鬼王を引きずり出し殺そうとするのですが、老翁たちは我々四人が鬼王の手と足を押さえるから、鬼王の首を切れといえます。実は酒天童子物語の元話では、助っ人は三人（三仏神）であったのですが、鬼王の手足を押さえる話とするために、四人（四仏神）になったといわれています。確かに客人の老翁などが手足を押さえています（スライド⑮）。鬼の手足の色が違いますから、わかりますね。源頼光たちが鬼王の首を落とすと、その首は天高く舞い上がります。危険を察知した頼光は家来の四天王から兜を借り、龍頭の兜の上に二重に被ります。ですから三重の兜となります。

すると案の定、頼光の頭に鬼王の首が降ってきて噛みつきま（スライド⑯）。冒頭にも触れた、頼光の頭に噛みつく「酒天童子の首」の場面です。鬼王の牙は、頼光が被った兜の二重ねまでは通るのですが、最後の龍頭の兜を噛み切ることはできませんでした。時を置かず、頼光は四天王に、鬼王の首の目をくじれと命じます。目をくじられた酒天童子の首はついに死にます。

《下巻第6段》

酒天童子を征伐した源頼光一行と四人の客人は、大江山の麓までもどり、名残を惜しみつつ形見の交換をします。詞書では、まず老翁と保昌



が「白上衣」と「うは矢の鎧」を交換し、さらに山伏と保昌が形見を交換するのですが、絵ではスライド⑰のように、老僧が前に出て頼光との間で「水精の念珠」と「龍頭の兜」を交換しています。絵では、四人の客人の筆頭者が、老翁から老僧に入れ替わります。実はこのことは、酒天童子物語の成立過程とも関わります。老僧が頼光に渡そうとする「水精の念珠」は、透明なのでよく見えませぬ。それに対して、頼光は脱いだ緋緘（ひおどし）の「龍頭の兜」を手にしています（スライド⑱）。さらに若僧と頼光が、「金の錫杖」と「腰の刀」を交換します。形見の交換が終わり、頼光が四人の客人に、御名と所在を問うと、老翁以下、所在のみを語り姿を消してしまいます。

そして酒天童子の首は都大路に運ばれ、晒し首（「大路渡し」といいます）されてから、酒天童子の首は宇治の平等院の宝蔵へと納められます。スライド⑲をご覧ください。これが大路渡しの場面です。都の貴族たちがたくさん牛車で来て見えていますね。頼光一行が都を出立する場面での貴族たちの描き方も同じものでした。鬼の首は、穢れたものですから天皇とかは見えてはいけないうえ、逸翁本では、天皇や上皇、摂政、関白も牛車を飛ばして観覧したとあります。一条天皇も藤原道長もみんな見に来たというわけです。酒天童子の首が納められた宇治の平等院の宝蔵は、御経など

を納める経蔵と同じものとされています。今年の三月にも行ったのですが、私には平等院のどの辺りに宝蔵（経蔵）があったのかわかりませんでした（スライド⑳）。平等院の宝蔵とは何か。まさに藤原摂関家の宝物を納めた場所として、藤原道長の子の頼通が龍となって宇治川からここを守っているという有名な話があるわけです。もともと平等院は、宇治川の中州といってよい場所にあるわけですから。酒天童子の首は、藤原氏の宝、王権の宝となったのだと理解されています。

《下巻第8段》

源頼光と藤原保昌は、鬼王との戦いに勝利しましたので、出立前に必勝の祈願にいった氏寺と氏神に御礼参りに行くことになります。スライド㉑は、源頼光が石清水八幡宮寺に御礼参りに行った場面です。拜殿において、石清水八幡宮寺の別当と頼光が対面しています。別当が、御宝殿の八幡大菩薩の御影（みえ）の御前にあった緋緘の「龍頭の兜」を頼光に見せると、頼光は懐から「水精の念珠」を取り出して別当に見せまです。拡大するとこうなります。スライド㉒です。ここがクライマックスです。石清水八幡宮は、本来は宮寺ですから僧侶である別当が代表者です。この場面についての詞書の一部を、お手元の配布資料にも載せておきました。

《下巻第8段の詞書》

読ませて頂きます。「(別当) 御宝殿の内を見せられければ、龍頭の兜の緋緘なるが御影の御前に有ると取出たりければ、頼光、懐より水精の念珠の有るを取出て見せられける」と。すると別当は、「こはいかに」、一体何事だ。その念珠は、八幡大菩薩さまの御影の持たせたまえる御念珠なり。なぜ頼光おまえが持っているのか——。そこで頼光は、「事の由」(「水精の念珠」を入手した由来)を語ります。すると「参り集りたる人々、随喜の涙をぞ流しける」というわけです。頼光は一連の経過——酒天童子退治の話語ったわけですね。ああ、そうかと皆が分かったわけですね。頼光による鬼退治を助けたあの老僧が誰であったのか。なぜ頼光を守っ

てくれたかを。それで、「随喜の涙」を流したわけでは。

《下巻9段》

下巻の9段は、逸翁本『大江山絵詞』の最後とされています。九州の「神崎の津」から筵帆（むしろほ）に屋形を持つ船が、解放された唐人たちを乗せて出航する場面です。水先案内の小舟も見えます。（スライド②③）この「神崎の津」がどこかということについても議論がありますが、ここではやめておきます。

以上が逸翁本の『大江山絵詞』のあらすじでした。逸翁本は、絵画表現としても中世の物語としても、久保先生のお話の中にもありました。非常に豊かな内容を持つたものです。さらにお話しすべきことがいくつもあるのですが、割愛せざるをえません。代わりにというのも変ですが、私が作成した逸翁本『大江山絵詞』の絵の部分だけの絵巻物の複製をお見せします。長くなるので、詞書は原則省略しております。遠くの方は見えませんが、ごめんなさい。後で、入口の受付の所に展示いたします。右手の方から見ていきますと、まず陰陽師の安倍晴明の占いが内裏に届きます。内裏では、紫宸殿の軒廊で公卿の詮議があり、その結果として、源頼光と藤原保昌の二人の武士に鬼王追討の命令が下り、両将が紫宸殿の階段下に控えたところですね。それから内裏を出立する場面となります。

次の絵巻物は、鬼城の門に源頼光一行が着いたところです。城内に渡辺綱が入り、綱が城内の寝所の前で「物申さん」と声をかけています。異時同図法によって、酒天童子が姿を現わし、そして頼光一行は門の際の廊に案内され、着座しています。その次の場面は、あらすじでは省略しましたが、廊下に控えた頼光一行の前を田楽のパレードが通ります。この場面は、中世の田楽の実相が描かれた有名な場面です。城内の鬼たちが田楽を踊ってみせるんですね。次の場面も省略しましたが、酒天童子に攫われていた藤原道長の子どもが、牢の中で「法華経」を誦読しています。道長の子どもは、「法華経」を守る日吉大社・比叡山の仏神によ

って保護されており、酒天童子も手が出せませんでした。

次が鬼退治の場面ですね。鬼王の首が刎ねられて、空に飛び上がったから源頼光の兜に噛みつくところですね。鬼王の首は頼光四天王らの太刀で目をくじられ、ついに死にます。そして、鬼王の首は都まで運ばれ、大路渡しとなります。宇治の平等院の宝蔵に納められる場面はありません。

③ 逸翁本「大江山絵詞」の成立と伝来

さて、配布資料の3頁目に入ります。「大江山絵詞」（酒天童子絵巻）の「物語」そのものは一四世紀ごろ、鎌倉時代末から南北朝時代前半ぐらいまでに京都の比叡山周辺で成立したといわれています。比叡山には優秀な学僧たちが集まっており、記家（きけ。天台記家）と呼ばれた学僧たちは仏教に関わる様々な伝承や中国から伝わる多くの物語などを収集・勉強しておりました。国文学の先生方は、酒天童子物語は天台記家たちが「醸し出した」と述べています。元話の一つに、中国唐代の「白猿伝」という話がありました。中国古代の將軍の美人の奥さんを山の神のサルが盗むという話のようです。この話は、中国では明の時代になると『孫悟空』の話になるわけですね。日本では、天台記家が比叡山で酒天童子退治の話にしていくわけですね。国文学の研究成果です。

②は絵巻物としての「大江山絵詞」（酒天童子絵巻）の成立です。①の酒天童子退治の物語が、絵巻物とされたものが「大江山絵詞」（酒天童子物絵巻）となるわけで、絵巻物としての成立は、少し遅れて一四世紀後半といわれています。ちなみに、後北条氏本は一五二二年に制作されたことがはっきり分かっていますので、逸翁本になる「大江山絵詞」の成立はそれより一五〇年ぐらい古いんですね。絵巻物の形態として、あるいは絵画表現としても後北条氏本よりも古態のものであり、優れたものと考えられます。

③は伝来についての通説です。これまで逸翁本は、幕末に現在の香取



市佐原の商家に質入れされていたものを香取神宮の大宮司家が入手したもので、それが明治時代になってから大宮司家から流出し、伯爵の松浦家に買われたとされてきました。ですから逸翁本は、京都周辺で元話も作られ、詞書の話も絵巻物にもなったのも京都周辺であり、たまたま幕末に千葉の田舎（私も千葉県人ですが）の香取の地にあったに過ぎないと考えられてきました。

④です。ところが今から二十年ぐらい前からの千葉県史編さん事業での香取文書調査（当時、私は県内の高校教員でしたが、編さん員として参加しました。司会の外山先生とも一緒の時がありました）の成果の一部として、逸翁本が江戸時代には確実に「酒呑童子の絵」などの名称で、香取神宮の大宮司家の家宝として伝来していたことがわかりました。さ

らにその他の諸史料を見ていくと、どうも戦国時代末までは千葉氏の一族の大須賀氏（成田の大須賀を名字の地とする大須賀氏です）が所持していたことが分かってきました。

そして⑤です。大須賀氏は、天正一八年（一五九〇）豊臣秀吉によって後北条氏、小田原北条氏が倒された時、千葉氏やその一族の大須賀氏は北条方ですから、多くが討ち死にします。しかし、大須賀氏の系図（配布資料6頁の系図①）に載る大須賀政胤ですが、政胤は成人した長男・二男・三男とともに討ち死にしますが、四男の朝胤と娘

（女子）に残された系図にはないが、状況証拠から鈴木が付け加えた）は、政胤の妻とともに大須賀郷の大室（成田市大室）に土着することになります。香取大宮司家の系図などでは、大須賀氏の娘は村の人々に育てられ、成人すると香取神宮の大宮司家に嫁入りしたとあります。⑥ですが、その時の嫁入り道具の一つに「酒呑童子の絵」があったことは、ほぼ確実です。

ということとは、逸翁本『大江山絵詞』（「酒呑童子の絵」）は、戦国時代までは千葉氏一族の大須賀氏が所持しており、それが戦国の領主としての大須賀氏が滅んだあと、土着した大須賀家に伝来し、成長した娘が香取神宮の大宮司家に嫁入りする際の嫁入り道具の一つとして、大宮司家にもたらされ、以後、江戸時代を通じて、大宮司家の家宝であったことがわかりました。幕末に一時的に佐原の商家に質入れしますが、その後、大宮司家に戻され、明治時代になりしばらくしてから松浦伯爵家に売却されたのでした。

さて、逸翁本を「なぜ大須賀氏が所持していたのか」。専門の方々には、戦国の争乱の中で、たまたま大須賀氏が手に入れたんだろうと処理するのだと思いますが、私のような専門知識のない者は、大須賀氏が所持していたなら、「大須賀氏や（本宗家の）千葉氏が制作させたものではないか！」と考え、拙著『酒天童子絵巻の謎』という本を書かせてもらいました。以下、この本に書いたことをごく簡単にお話しします。

④ 拙著『酒天童子絵巻の謎』に書きたいと

まずは①の頼光四天王の系譜についてです。四天王（渡辺綱・坂田金時・平貞通・平季武）が坂東（関東）との関係が深い存在であったという話です。四天王のうち、渡辺綱以外の三人は平安後期に成立した『今昔物語集』に載る話にできます。その話によれば、源頼光の邸宅は大内裏の北東、一条大路が堀河を渡る、一条尻橋の南東際にあり、一条邸と呼ばれていました。「坂田金時」（下野毛公時）・平貞通・平季武の三

人は、都では源頼光の家来であり、頼光のボディガードでしたが、他方で、坂東（関東）に拠点を持っており、しばしば坂東にも帰る存在でした。なかでも平貞通は、関東の勇者でもあったと考えられます。平季武は、その実在性が疑われますが、貞通とほぼ同様の存在として描かれています。

「坂田金時」は、実在の人物で、平安後期の人物としては「下毛野公時」という氏名（うじな）を持つ存在でした。彼は内裏に仕える近衛舎人（このえのとねり）であり、相撲人（すまいにん）でもありました。非常に強い相撲取りであるとともに、東遊（あづまあそび）の名手だったといわれています。「駿河舞（するがまい）」などの坂東の舞楽（東遊）は宮中の行事に取り入れられ、今は雅楽になっているそうですね。こうした坂東との関りから、「坂田金時」となり、さらに久保先生のお話にあった「足柄山の金太郎」になるわけですね。

四人目の渡辺綱については、「渡辺」は大阪の淀川の河口、大坂城の西の「渡辺津」を名字の地とするもので、綱の本拠地は渡辺津周辺であるとされています。しかし、これも系図上や物語の話ではありませんが、渡辺綱は源充の子で、武蔵国の箕田に生まれたという記載があります。後に源敦という人の養子になる。源敦は源氏の祖の源満仲の娘婿ですから、綱は源頼光の父満仲の義理の孫となるわけです。それは物語上の話だという説もあるんですけど。こうした経緯をへて源綱は、摂津国の渡辺の地を拠点とし、その一党が渡辺党に展開していくというわけです。渡辺党の本姓は「遠藤」だというのが有力なようですが。

そこで私が注目することは、渡辺綱の生まれが武蔵国の箕田とされていることです。武蔵国の箕田は、埼玉県鴻巣市の箕田（みだ）とする説と東京都港区の「三田」（みた）とする説があります。前者ですと、近くに「箕田館」という中世武士の大きな館の跡が残っています。また、後者の場合では、慶応大学の敷地の西側の坂が「綱坂」といいますね。もちろん、後に付会されたことなのかもしれませんが、武蔵国（埼玉県

や東京都）の箕田（三田）の生まれであるとされたことは、渡辺綱の性格に関わる。つまり、綱も坂東（関東）との結びつきがあるかもしれないと考えています。

そして、問題となるのが、②の頼光四天王の一人、平貞通が、逸翁本では「平忠道」とあることです。逸翁本の祖本にあたる可能性の高い、陽明文庫本「酒天童子物語絵詞」（詞書のみ）には、「平貞通」とあり、後北条氏本他の諸本は「平貞道」「平定道」などと見えますが、「忠道」とあるのは逸翁本（正確には「別巻詞書」）のみなのです。陽明文庫本が逸翁本の祖本にあたることを、逸翁本（の詞書）は頼光四天王の一人、「平貞通」を「平忠道」にすることで成立したものであるということになります。「平貞通」は、先に述べましたように坂東の武士でもあった可能性が高いのですが、坂東平氏の系図の中で、早くに坂東平氏の祖の一人に「忠道」を充てる系図は、三浦氏と千葉氏の系図（配布資料6頁系図③）に限られます。

系図③にみるように、千葉氏と三浦氏は一体の系図を持つわけで、「忠道」を一族の祖として系図に書き込む意識と『大江山絵詞』（酒天童子絵巻）の祖本の「平貞通」を「平忠道」とする思いは、同じものと考えられます。こうした意識や思いを持って、逸翁本を制作させた主体は千葉氏と考える以外ないと思います。

③です。そうだとしますと、いったい千葉氏の誰の時代に制作されたのか、誰が制作に関わったのか。そこで私が注目したのが、南北朝時代の千葉氏胤（千葉介 一三五―一六五）です。氏胤は京都生まれで、司会の外山先生の研究にもありますように、歌人としても著名で勅撰歌集の『新千載和歌集』に歌が残されています。ここからは推定ですが、氏胤は京都で逸翁本の祖本に出会い、詞書の一部、「平貞通」を「平忠道」などと書き改めさせて、逸翁本『大江山絵詞』を制作させたのであろうと。④です。氏胤は、二十九歳で亡くなるのですが、その前後に逸翁本は千葉にもたらされ、千葉介の満胤・兼胤・胤直・胤将あるいは胤宣と相



伝えられたと考えます（系図①）。

⑤です。系図②に詳しいように、下総千葉氏の直系の十二代の胤直と弟胤賢、十三代の胤将（病死）と弟の胤宣は、享徳の大乱の中で上杉方に付いたため、享徳四年（一四五五）に、古河公方の足利成氏方の千葉氏一族の原胤房や馬加康胤に滅ぼされてしまいます。その際、逸翁本は、千葉介を継承する馬加千葉氏には渡されず、十三代の「胤将の御守」であった大須賀直胤に伝えられた。そして、その後大須賀氏に相伝されたが、天正一八年（一五九〇）小田原北条氏の滅亡とともに、大須賀政胤から妻として幼い娘へと継承されたと推定しています。

これまで逸翁本の伝来のみ、お話ししてきましたが、千葉氏から大須賀氏へ、そして香取大宮司家へと伝来したものは、逸翁本のみではなく、

他の千葉氏の家宝「威信財」も一緒に伝えられました。それが、「八幡太刀」（千葉介常胤が夢想で宇佐の八幡神から賜ったとされるもの）と「寄辺（よるべ）の水入れ」（現在は香取神宮蔵）、「駒角」・「牛玉（ごおう）」などでした。

⑥です。他方、逸翁本を含む千葉氏の家宝「威信財」を継承できなかった、原胤房や馬加康胤（千葉介）は、もう一つの酒天童子の物語をつくります。その物語は、千葉市立郷土博物館にある「旧妙見寺（千葉妙見社）文書」や久保先生が検討された『千学集抜粹』の中に見える「源

頼光家来の（宝生（保昌）の太刀）にまつわる藤原保昌を主人公とする「酒呑童子退治」の物語です。この話については、外山先生が検討されていますが、もともとは「源頼光家来の宝生（保昌）の太刀」の話であり、保昌は頼光の家来であったはずですが、「源頼光の家来の」部分を略すること、藤原保昌を主役に組み直したものでした。したがって、逸翁本の「酒天童子退治物語」から派生した、亜流といえるべきものと思います。ならば「酒天童子退治物語」の平貞通を平忠道に書き換えて逸翁本を制作したのは千葉氏、といっても馬加康胤以前の千葉氏しか考えられない。そして千葉氏は、逸翁本『大江山絵詞』に対して強い思い入れを持ったのではないかと。もともと坂東武士としての千葉氏には「都の武士」へのあこがれがあった。なかでも京都に生まれた千葉氏胤は、都の武士としての意識を強く持ったであろう。千葉氏が逸翁本『大江山絵詞』を家宝の一つとしたのは都の武士への憧憬によるものであった。そんなふうにご考えております。

（5）拙著への批判

こうした拙著の主張に対しては、厳しい批判があるのですが、時間の関係もあり、割愛を致します。配布資料をお読みになって下さい。

最後に、系図③をもう一度見ておきます。系図③は、山門（やまと）家本「桓武平氏系図」と呼ばれているもので、千葉氏の支流を称する薩摩国山門院（鹿児島県出水市）の山門氏に伝来したもので、原型は一三世紀後半に成立していたものとされています。私が手書きで丸く囲ったところをご覧ください。そこに「良文」がいて、子に「忠頼」と「忠道」がいます。忠頼流が上総氏、千葉氏の系譜になりますね。そして忠道流が三浦氏の系譜となります。三浦氏の祖を「忠道」とする系図としては、今のところ一番古いものとされています。「忠道」のところに注記には、「良文の子、忠頼の弟なり。頼光朝臣四天王随一なり」とあり、さらに「のち貞道、又は忠光」とあります。この系図は千葉氏の支流の家系図です。



から、「忠道」を千葉氏の祖の「忠頼」の弟とする認識は、三浦氏と千葉氏に共通のものだったと考えられます。

まとめにかえて

ですから私は、逸翁本『大江山絵詞』の祖本の詞書の頼光四天王の一人である「平貞通」を「平忠道」と書き換えて、逸翁本を制作させたのは、「平忠道」を坂東平氏の祖の一人とする千葉氏の系譜認識によるものと考えております。逸翁本『大江山絵詞』は、戦国時代にたまたま大須賀氏が入手したもののではなく、千葉氏や大須賀氏が何らかの主体性を持って制作させたものと考えています。

拙著『酒天童子絵巻の謎』に対しては、様々なご批判を頂きましたが、ご批判への反論も兼ねて、これまでしつかりとした基礎的テキストがなかった逸翁本に関わる詞書釈文を提示しました（『都留文科大紀要』91号）。さらなる検証が必要ではありませんが、私の行った詞書の整理からしても、逸翁本『大江山絵詞』は千葉氏本、千葉氏本『大江山絵詞』といってよいものである、と私は考えております。少なくとも「別巻詞書」は、千葉氏本と言わざるを得ないというのが本日のお話の結論です。

冒頭に触れた「五島のバラモン風」の図柄をもう一度ご覧く

ださい。バラモン風の「鬼が兜に噛みつく」という図柄のモチーフは、逸翁本『大江山絵詞』の図柄「酒天童子の首」にあるのではないかと。このバラモン風の写真を撮る際に、ビニール袋の中から説明書きがでてきました。そこにこう書かれています。「図柄には、鬼に立ち向かう武士の兜の後姿が描かれており、「裏兜」とよばれるもので、「倭寇がたらしめた可能性が強く、距離を測つたり、風向きを調べたり、何かの合図の為に掲げられたものではないか」とあります。久保先生が最初にお話しされたように、鬼退治の話は、節分の行事からもわかるように境界の外に鬼を追い出すことと関ります。五島列島は古代以来、日本の西の国境とされてきました。国境である五島のバラモン風の図柄と鬼退治を象徴する「頼光の兜に噛みつく鬼の首」（酒天童子の首）とは、何らかの形で関わりがあるかもしれない。そんなことを思っています。以上、まとまりのない話でしたが、ここまでとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

2022年12月10日

令和4年度 千葉市・千葉大学公開市民講座
於：千葉大学・けやき会館大ホール

【逸翁本『大江山絵詞』の伝来と千葉氏】

都留文科大学教養学部 鈴木哲雄

1) 「大江山絵詞」(酒天童子絵巻)とは

- ①源頼光とその四天王による大江山の鬼退治物語
- ②伝来する二つの絵巻物
A：逸翁本「大江山絵詞」(二巻と「別巻詞書」、大阪・逸翁美術館所蔵
B：後北条氏本「酒伝童子絵」(三巻)、東京・サントリー美術館所蔵
- ③室町時代から江戸時代に流布した大江山の鬼退治物語は、B：後北条氏本の系統
- ④A：逸翁本が広く知られるようになったのは、明治20年(1887)に、香取神宮の旧大宮司家が伯爵の松浦家に売却して以降。
昭和13年(1938)に小林一三(逸翁)が購入→重要文化財

2) 逸翁本『大江山絵詞』を読む

《上巻1・2段》 スライド①②

- ・さて、ことのはじまりは、平安時代中頃的一条天皇(在位986～1011年)の時代のこと。正暦年中(990～995年)に都の貴族から人民にいたるまで、多くの老若男女が失踪する事件がおき、都の内外の町や村は悲しみ泣く声につまれた。
- ・朝廷は安部清明の占いにもとづいて、帝都の西北大江山の鬼王の仕業だと知り、源頼光と藤原保昌に追討を命じる。(藤原道長の時代)
- ・命令を承った源頼光と藤原保昌は氏寺氏神に必勝の祈禱をする。
源頼光→八幡三所(石清水八幡宮寺)、日吉山王(比叡山・日吉大社)
藤原保昌→熊野三所(熊野権現)、住吉明神(住吉大社)
- ・七人の兵(七騎)による追討
五騎：源頼光と四天王：渡辺綱・坂田公時・平貞通(忠道)・平季武
二騎：藤原保昌と従者

《上巻3段》 スライド③～⑦

- ・長徳元年(995)11月1日。帝都を出立した頼光・保昌の一行七騎は、大江山へと向かう。
- ・途中の洞窟に四人の客人が待つ。頼光一行は、あやしい者かと身構える。老翁たちはご馳走を用意しており、真ん中の壺(「死筒の酒」)は持って行くことにする。

《上巻4段》 スライド⑧⑨

- ・老翁の提案で山伏姿となり、深山幽谷を踏み分けていく。岩穴をぬけると、川辺で血のついた衣服を洗う老女に出会う。老女は、200年ほど前に酒天童子にさらわれ、洗濯女にされたと語る。
- ・老女から酒天童子の城について聞く。鬼城の門には「酒天童子」という扁額があるという。
- ・源頼光の指示で渡辺綱が城内入り、寝所の前で「物申さん」と声をかける。すると簾をあけて酒天童子が姿を見せる。

《上巻6段》 スライド⑩⑪

- ・城内の廊に案内され、容顔美しい女房達に銀の瓶子（へいし）の酒や金の鉢（はち）に盛った肉などで接待される。頼光らの求めで、酒天童子も現れる。
- ・酒天童子は頼光一行に「血酒」をすすめ、頼光は山伏の「死筒の酒」（神便鬼毒酒）を酒天童子にすすめる。
- ・「死筒の酒」に酔った酒天童子は寝所へ戻る。他方、源頼光らは蓑帽子をかぶり、姿を消して鬼城を探索する。

《下巻3段》 スライド⑫

- ・頼光たちは家来のもとにもどり、鎧兜を着けて鬼どもを征伐する。

《下巻4段》 スライド⑬～⑯

- ・寝所では、鬼姿の酒天童子が女房たちに体をさすらせて寝ている。二人の僧の祈りで、寝所の鉄石の扉が打ちやぶられる。
- ・四人の翁や僧たちが酒天童子の手足を押さえ、頼光・保昌の主従が酒天童子の首をはねる。
- ・切られた鬼王の首が宙を舞う。危険を察知した頼光は、四天王から兜を借り、三重に兜をかぶる。その頼光の兜に鬼王の首がかみつく。

《下巻6段》 スライド⑰～⑳

- ・酒天童子を征伐した頼光らと四人の翁や僧たちは別れに形見の交換をする。老僧は「水精の念珠」を頼光に、頼光は「龍頭の兜」を老僧に渡した。
- ・酒天童子の首は、都大路を運ばれ（大路渡し）、酒天童子の首は、宇治の平等院の宝蔵へおさめられた。

《下巻8段》 スライド㉑㉒

- ・源頼光と藤原保昌は氏寺と仏神に御礼参りに行く。石清水八幡宮寺の拝殿では、別当が御影の前にあった「龍頭の兜」を頼光に見せ、頼光は「水精の念珠」を見せる。

《下巻8段の詞書》

（別当、）御宝殿の内を見せられければ（ば）、龍頭のかふと（兜）の、火おとし（緋緘）なるか（が）、御影の御前に有（る）とて取出たりければ（ば）、頼光、懐より水精の念珠の有（る）を取出て見せられける。別当、こ（此）はいか（如何）に、御影のも（持）たせ給へる御念珠なりと疑（い）申ければ（ば）、事の由を語（り）給（う）に、参（り）集たる人々、随喜の涙をそなか（流）しける。

《下巻9段》 スライド㉓

- ・九州の神崎の津から筵帆（むしろほ）に屋形をもつ船が、解放された唐人をのせて中国に出航するところ。水先案内の小舟も見える。

以上が、逸翁本（香取本）『大江山絵詞』のあらすじでした。

* 逸翁本は、絵画表現としても、中世の物語としても、もっと内容豊かなものなのですが、本日は割愛せざるをえません。

3) 逸翁本「大江山絵詞」の成立と伝来

①酒天童子退治物語は 14 世紀ごろ（鎌倉時代末から南北朝時代）までに、京都・比叡山周辺で成立した。比叡山の学僧（記家）たちによって醸し出されたもの。

* 中国唐代の「白猿伝」

②酒天童子退治物語を絵巻物としたもの＝「大江山絵詞」は、14 世紀後期に制作か。

* 後北条氏本の制作は 1522 年。

③伝来の通説：幕末に佐原の商家に質入れされていたものを香取神宮の大宮司家が入手し、それが明治時代に流出したもの。

→だから、都＝京都周辺で制作されたものが、たまたま香取の地にあったに過ぎない。

④その後の千葉県史の編纂事業に関わる調査・研究の中で、江戸時代には、確実に「酒呑童子の絵」という呼称で、「大江山絵詞」が香取神宮の大宮司家の家宝であったことが明らかとなり、さらに戦国時代末までは、千葉氏一族の大須賀氏が所持していたことがわかってきた。

⑤天正 18 年（1590）豊臣秀吉によって小田原北条氏が倒され、千葉氏や大須賀氏の多くの武士が討ち死にしたが、残された大須賀政胤の妻と子供らは大須賀郷の大室に土着することになる。

⑥その後、その娘が香取神宮の大宮司家に嫁入りするが、その嫁入り道具の一つに「酒呑童子の絵」があった。〈系図①〉参照

* なぜ大須賀氏が所持していたのか。

→ たまたま大須賀氏が手に入れた？

→ 大須賀氏や千葉氏が制作させたものではないか！

4) 拙著『酒天童子絵巻の謎』に書いたこと

（『酒天童子絵巻の謎―「大江山絵詞」と坂東武士』岩波書店、2019 年）

①頼光四天王の系譜：坂東との関係

・平貞通（忠道）（『今昔物語集』：頼光の一条邸の侍であり坂東の勇士でも）

・平季武（同上）

・坂田公時（1000-1017、同上、近衛舎人）「駿河舞」等の東遊の名手

→ 「足柄山の金太郎」

・渡辺綱（？ 953-1025）源充の子で武蔵国美田生まれ。源敦の養子。源満仲（頼光の父）の義理の孫となり、摂津国渡辺津を拠点とする。

* 美田：埼玉県鴻巣市箕田（ミダ）や港区三田

②平貞通と平忠道

・陽明文庫本「酒天童子物語絵詞」での頼光四天王

（渡辺綱・坂田公時・平貞通・平季武）

・逸翁本（「別巻詞書」）での頼光四天王

（渡辺綱・坂田公時・平忠道・平季武）

→ 逸翁本は『今昔物語集』などにみえる祖本の「平貞通」を千葉氏の系図に載る「平忠道」に書き換えている。それは「千葉氏」によるもの＝逸翁本の制作主体は千葉氏なのではないか！

③千葉氏による逸翁本制作年代を京都生まれの「氏胤の時代」(千葉介 = 1351 ~ 1365)と推定。京都で、逸翁本の元本か酒天童子物語の祖本に接した氏胤が、「平貞通」を「平忠道」などと書き換えさせ、逸翁本を制作させた。

④その後、逸翁本は氏胤から満胤—兼胤—胤直—胤将・胤宣へと相伝された。

→系図①参照

⑤しかし、享徳4年(1455年)に千葉介胤直・胤宣父子が原胤房や馬加康胤(のち千葉介)に攻められた際に、逸翁本などの千葉氏の家宝が千葉介に近侍した大須賀氏に渡ったものと考えた。その際に、千葉氏から大須賀氏に渡ったものには、逸翁本を含む千葉氏の家宝 = 威信財としての

・「八幡太刀」(千葉介常胤が夢想で宇佐の八幡神から賜ったもの)

・「寄辺の水入れ」／・駒角／・牛玉

などがあつた。→系図②①参照

⑥他方、原胤房や馬加康胤以降の馬加千葉氏側には、旧妙見寺(千葉妙見社)文書や「千学集抜粹」に見える「源頼光家来の宝生(保昌)の太刀」にまつわる、もう「一つの酒天童子物語」がつくられた。〈系図②〉参照

「もう一つの酒天童子物語」は、明らかに逸翁本から派生した、亜流と見るべきである。ならば、酒天童子物語の「平貞通」を「平忠道」に書き換え、逸翁本を制作したのは千葉氏と考えられる。そして千葉氏は、逸翁本「大江山絵詞」に対して強い思い入れをもった。それは「都の武士への憧憬」であつた。

5) 拙著への批判(高橋昌明「書評 鈴木哲雄著『酒天童子絵巻の謎—「大江山絵詞」と坂東武士』」(『日本史研究』687号、2019年)

①頼光四天王の系譜：坂東との関係

・逸翁本が坂東武士の物語でもあるとするのは、説話成立時点を300年以上遡れば、系譜上坂東の世界にいきつくという程度の話。

②平貞通の平忠道への書き換え

・『今昔物語集』(鈴鹿本)は、1130年代に成立してから約300年誰にも知られず眠っていた。だから、逸翁本成立時に作者が『今昔物語集』を参照することは不可能。

・系図上の「平忠道」は三浦氏の祖であり、千葉氏の祖ではない。

〈鈴木のかえ〉

・鈴鹿本『今昔物語集』は鎌倉時代中期の書写本とされており、鈴鹿本がなくとも、「平貞通」に関する類似の話はあつたろう。

・千葉氏と三浦氏とで、共有された系図(良文流平氏として共有の認識)なのではないか。

・「忠道」の載る最古の系図は、千葉氏の支流を称する薩摩国の山門氏の「桓武平氏系図」で、**鎌倉時代後期までに成立。**〈系図③〉参照

③制作年代を「氏胤の時代」(千葉介 = 1351 ~ 1365)とすること。

・根拠が薄弱。幅をもたせるのが常道。←岡本麻美氏の南北朝前期説(「逸翁美術館所蔵『大江山絵詞』考」『美術史』165号、2008年)

《高橋氏の主張》

- ・逸翁本の作成の動機は、末尾にある唐人などの送還にあるとして、応安7年（1374）4月に、足利義満が遣明使とともに「中国・朝鮮人被虜送還前後のいきさつを踏まえて創作されたことは確実である」とする。だから、1374年以降の制作。←これも一つの仮説
- ・逸翁本は、足利義満への献上品（室町殿絵巻コレクション）であった可能性もあり、大須賀氏が所持したのは足利義政時代の財政難から分散流出した結果かもしれない。

《鈴木の反論》

- ・足利義政の時代に流失したものとすると、だれが「平貞通」を「平忠道」に書き換えたのか？
- ・また、相澤正彦氏による逸翁本=鎌倉地方絵巻説も存在し、鎌倉地方=坂東で成立した可能性もある。（「逸翁美術館本『大江山絵詞』の画風をめぐって」『MUSEUM』477号、1990年）

④の「もう一つの酒天童子物語」への批判

（岡野浩二「千葉氏妙見信仰の政治史的考察」『古代文化』73-2、2021）

- ・逸翁本と「千学集抜粹」などの「宝生太刀」の説話を関連づけて、逸翁本が馬加千葉氏以前の千葉氏本宗家の時代に遡るとはいえない。

《鈴木ของ考え》

- ・「妙見納物」に、「火取・水取・玉・牛王、一条院の薄墨の御証文」、「宝生懐太刀、即珠天童子を打し刀」などとある話が、「平忠常→一条朝→酒吞童子」という連想によって生じた説話、とは考えにくのではないか。

まとめにかえて

- ・逸翁本は、たまたま大須賀氏が入手したものにすぎないのか。
- ・あるいは、逸翁本の制作や入手の過程に千葉氏や大須賀氏の主体性はないのか。・議論の前提とすべき、逸翁本の詞書については、
鈴木哲雄「大江山絵詞（酒天童子絵巻）」の詞書釈文—逸翁美術館本と陽明文庫本との比較を兼ねて」（『都留文科大学研究紀要』91号、2020年）
で整理しました。
- ・さらに検証が必要ではあるが、私の詞書の整理からも、逸翁本は、“千葉氏本「大江山絵詞」”だったといえるのではないかと改めて考えている。少なくとも、「別巻詞書」は千葉氏本であると。

《主な参考文献》

小松和彦『酒吞童子之首』せりか書房、1997年

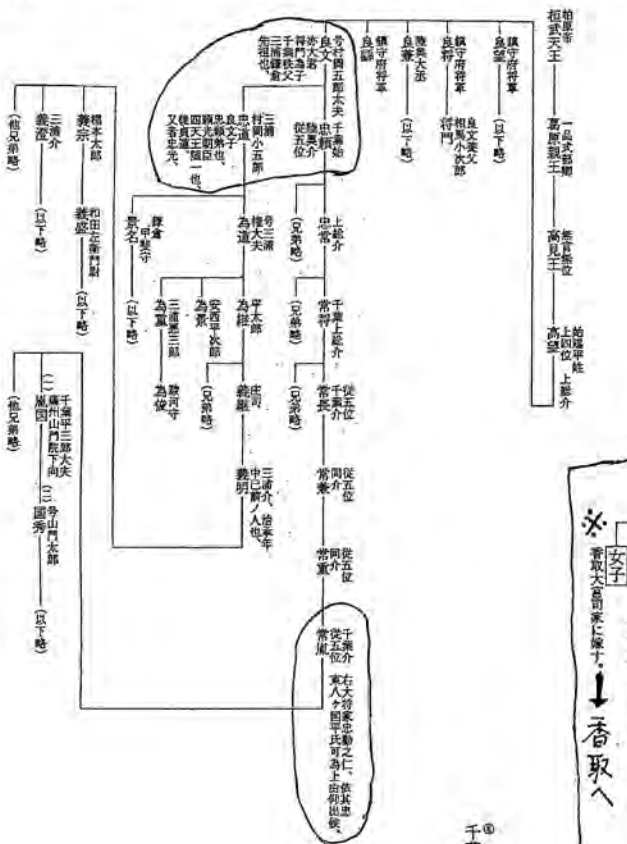
佐竹昭広『酒吞童子異聞』岩波書店、1992年（初出1977年）

鈴木哲雄『酒天童子絵巻の謎』岩波書店、2019年

高橋昌明『定本 酒吞童子の誕生』岩波書店、2020年（初出1992年）

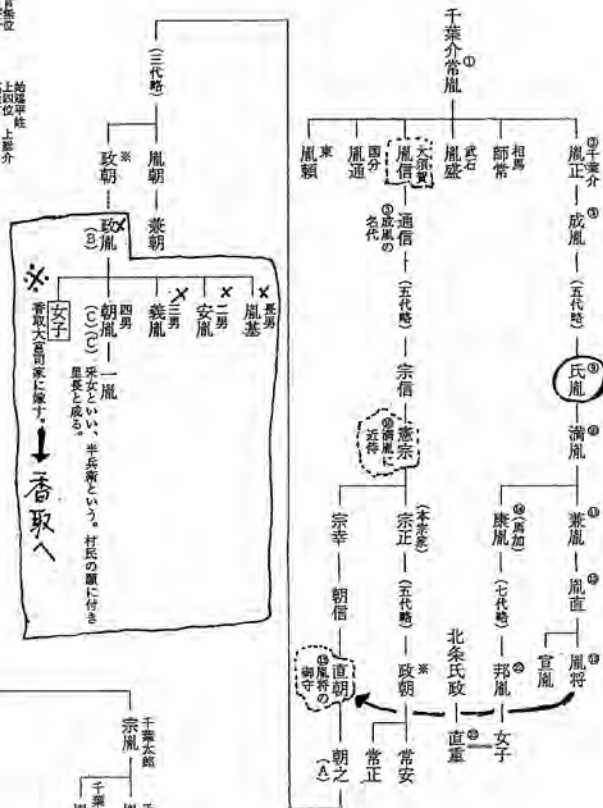
外山信司「藤原保昌伝承と千葉氏」（佐藤博信編『中世東国の社会と文化』岩田書院、2016年）

③ 山門家本「桓武平氏系図」(山門氏系図)の部分(『鹿兒島県史料 旧記雜録拾遺 家わけ六』)



[関係系図]

① 大須賀氏略系図——千葉氏と大須賀氏の関係



② 下総千葉氏の本宗家滅亡(『大塚町史 通史編 上巻』790頁の系図を修正) ねじ

2022年12月10日
令和4年度 千葉市・千葉大学公開市民講座
於：千葉大学・けやき会館大ホール

【逸翁本『大江山絵詞』の 伝来と千葉氏】

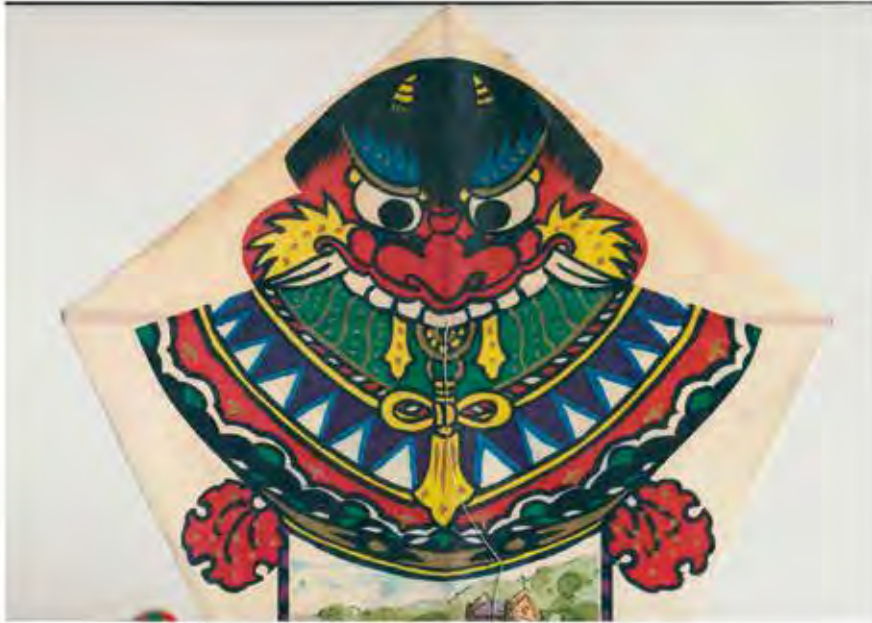
都留文科大学教養学部
鈴木哲雄

* 絵巻のスライドは、主に小松茂美編『続日本の絵巻26』（中央公論社）から作成しました。

ただし、No.10・22は『絵巻 大江山酒呑童子・芦引絵の世界』（思文閣出版）より、No. 5(44)・23は『酒天童子絵巻の謎』（岩波書店）の口絵より、作成しました。

写真は、鈴木哲雄が撮影したものです。

プロローグ：五島のバラモン風



NHKの朝ドラ「舞いあがれ！」
に、五島のバラモン風がでて
きます。バラモン風の凧柄は、
どこからきているのでしょうか？

バラモン旛



逸翁本『大江山絵詞』
の「酒天童子の首」



1)「大江山絵詞」(酒天童子絵巻)」
とは

→配布資料参照

2) 逸翁本『大江山絵詞』を読む

→ 図版以外は、配布資料参照

▼スライド①

① 紫宸殿の階下に控えた源頼光と藤原保昌



②向かって
左：藤原保昌 右：源頼光



▼スライド③

スライド②▲

③頼光・保昌が大内裏から
出立する



④大内裏から大江山までの道筋

拙著p.16・17より



▼スライド⑤

スライド④▲

⑤途中の洞窟に四人の客人が待つ。 あやしい者かと身構える頼光一行



⑥ 四人の客人(右から、老翁・老僧・若僧・山伏)



▼スライド⑦

スライド⑥▲

⑦ 老翁たちが用意したご馳走。真ん中の壺(「死筒の酒」)は持って行くことに。



⑧鬼城＝酒天童子の城に着いた一行



▼スライド⑨

スライド⑧▲

⑨姿を見せる酒天童子



⑩酒天童子と頼光一行の前の「血酒」と「死筒の酒」



▼スライド⑩

スライド⑩▲

⑪城内には、人を鮫に仕込んだ大桶や死骸が散乱する。牢内の唐人。



⑫ 鎧兜を着けて、鬼どもを征伐する。



▼スライド⑬

スライド⑫▲

⑬ 寝所の鬼王＝「酒天童子」



⑭二人の僧の祈りで、寝所の鉄石の扉が打ち破られる。



▼スライド⑮

スライド⑭▲

⑮酒天童子の首をはねる。



⑩頼光の頭にかみつく酒天童子の首



▼スライド⑩

スライド⑩▲

⑪形見の交換



⑱老僧は「水精の念珠」を頼光に、頼光は「龍頭の兜」を老僧に渡す。



▼スライド⑱

スライド⑱▲

⑲酒天童子の首は、都大路を運ばれた(大路渡し)。



⑳そして酒天童子
の首は、宇治の
平等院の宝蔵へ



▼スライド㉑

スライド㉑▲

㉑源頼光の石清水八幡宮寺へ
の御礼参り



②②別当は「龍頭の兜」を見せ、
頼光は「水精の念珠」を見せる。



スライド②②▲

下巻8段の詞書

→配布資料参照

②③九州の神崎の津。唐人の出航。



スライド②③▲

以上が、逸翁本『大江山絵詞』のあらすじでした。

* 逸翁本は、絵画表現としても、中世の物語としても、もっと内容豊かなものなのですが、本日は割愛せざるをえません。

3) 逸翁本「大江山絵詞」の成立と伝来

→配布資料参照

なぜ大須賀氏が所持していたのか。

→たまたま大須賀氏が手に入れた？

→大須賀氏や千葉氏が制作させたものではないか！

4) 拙著『酒天童子絵巻の謎』 に書いたこと

→ 図版以外は、配布資料参照

『酒天童子絵巻
の謎』(岩波書店、
2019年)



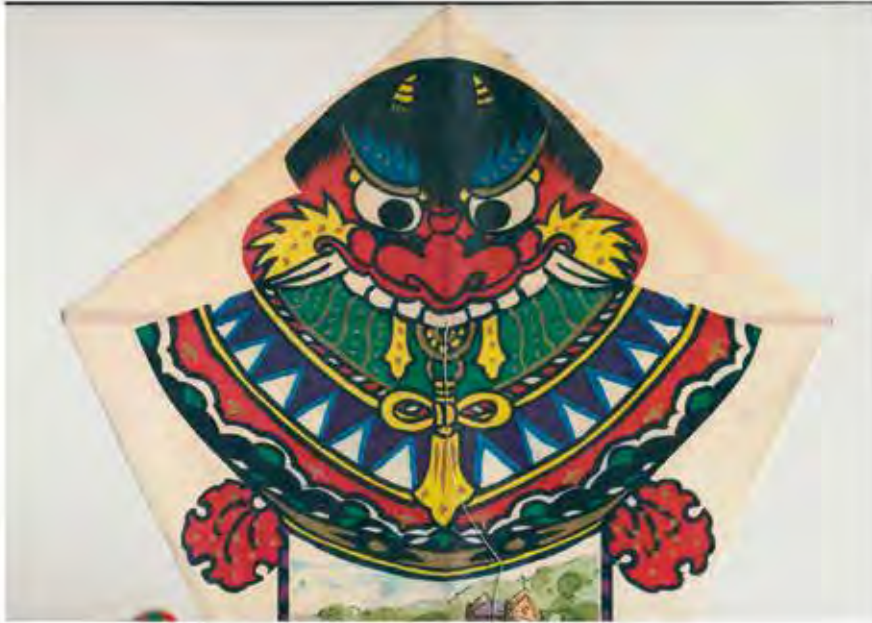
5) 拙著への批判

→配布資料参照

まとめにかえて

→配布資料参照

エピローグ：バラモン凧の図柄



このバラモン凧は、25年ぐら
い前に五島出身の方から、頂い
たものです。今回、写真を撮る際
に、説明書きを見つけました。

五島のバラモン風(だこ)

バラモン風は五島に古くから伝わる大風の名称で、バラモンとは地元の表現で「活発で元気のいい」とか「荒々しく向こう見ず」という意味があります。絵柄には、鬼に立ち向かう武士の兜の後姿が描かれており、「裏兜」と呼ばれるもので、敵に背中を向けない勇者

の姿を表しているといわれております。バラモン風は遣唐使や倭寇にゆかりのある地域に限られている事から、倭寇がもたらした可能性が強く、距離を測ったり、風向きを調べたり、何かの合図の為に掲げられたものではないかといわれております。

ここには「倭寇」とのかかわりが書かれていますが、もう一度、「バラモン胤」の図柄と源頼光の兜に噛みつく「酒天童子の首」の図柄を見比べてみましょう。

バラモン胤



逸翁本『大江山絵詞』の「酒天童子の首」



どうでしょうか。何か関係がありそうではないですか。

鬼を退治するという頼光の物語が、古代以来の西の国境域にあたる五島列島にバラモン風の図柄として継承されてきたとみることもできるように思います。

《主な参考文献》
→配布資料参照

以上です。ご清聴ありがとうございました。

「クロストーク」

芦田 伸一（以下、芦田）

皆さま、お戻りでございましたでしょうか。ここからクロストークに入りますが、コーディネーターとして外山研究員が入る関係で、ここから司会を交代させていただきます。私、郷土博物館の芦田と申します。よろしく願います。それでは早速クロストークに入りたいと思います。

外山研究員、進行をよろしく願います。

外山 信司（以下、外山）

それでは引き続きよろしく願います。長時間にわたってご講演を二本聞いていただきましたけれども、大変興味深いお話が続きまして、皆さんの中にはこのような素晴らしい逸



翁本『大江山絵詞』を千葉氏、広くいえば千葉一族ですね、「千葉六党」の一つ、常胤の四男胤信に始まる大須賀氏が持ついたということを伺って、大変驚かされている方も多いのではないかと思います。

そういうことを前置きにしまして、まず鈴木先生から久保先生への質問とかコメント、何かお聞きになりたいことがありますから、願いたいと思います。

鈴木 哲雄（以下、鈴木）

あまりよく考えていなかったのですが、久保先生のお話

しにあった藤原保昌による鬼退治の話の枠組は、いつ頃に生まれたものとお考えでしょうか。お伺いしたいと思います。

外山

それでは、久保先生、願います。

久保 勇（以下、久保）

少し誤解があつたようで、訂正したいのですが、私が紹介したのは保昌の太刀をめぐる伝承です。刀剣伝承―刀をめぐる伝承―として、ということなので、保昌が鬼退治をする話が伝承した時期の問題ではありません。備前の刀工「三平」と称される「包平」「高平」「助平」のうち、保昌の太刀を「助平」が作ったという伝承が一五世紀の前半ぐらいに見受けられるという状況を考えると、それを前提とした理解になってきます。千葉氏に保昌の刀が伝わったという時期と、刀剣伝承が伝わっている時期が一致しないと、刀の価値が認識されないと思います。「酒天童子の物語」における保昌の活躍という知識に加え、その名刀を千葉氏が保有した伝承が『千学集抜粹』にあるわけですから、鈴木彰さんの説を参照したように一五世紀の初めくらい、とお答えするということになります。

外山

ありがとうございます。それでは反対に、久保先生から鈴木先生へのコメントや、お聞きになりたいことなどがありましたら願います。

久保

根本的な問題になってしまうのですが、鈴木先生の基本的なスタンスとして、逸翁本成立時点から千葉氏がずっと持っていたのだらう、もつと言え、千葉氏がそもそも逸翁本を作らせたのであろう、という発想については、共有される部分とされない部分があると思います。千葉氏については、今日資料としてお配りするだけで紹介しなかった『源平鬪諍録』の「妙見説話」の終わりの部分があるわけです。ここ

では、千葉氏にとって妙見さんというのは、他の氏族には絶対祀らせない。源頼朝でさえ、妙見さんを祀ることを常胤は許さず、常胤が頼朝に仕えていることを以て頼朝殿に妙見さんの加護があると思っってもらいたい、と書かれています。「家」の意識、嫡流に限定された妙見さんの位置付けが示されています。このように一族間でずっと伝えていかなければならないという意味が千葉氏の中に、氏族としての内部的な発想としてあったとすれば、現存逸翁本も（妙見さんと同じように）できた当初から千葉氏に代々伝えられているというように理解して良いのか、という疑問があります。私が話せなかったことを補足しながらの質問ですが、この辺りの問題はいかがでしょうか。

鈴木

非常に難しいのですが、拙著の中では、『源平闘諍録』に載る千葉妙見説話は坂東武士としての千葉氏の物語であり、栄福寺所蔵の『千葉妙見大縁起絵巻』の詞書の内容は、若年の千葉介頼胤のもとに千葉氏一族を結集させようとした後見人の千田泰胤の思惑が反映したものとしました。そして、南北朝時代の氏胤の時代に、逸翁本『大江山絵詞』（千葉氏の祖には、平安後期の頼光四天王の「平忠道」（平貞通）がいた）という都の武士の物語を、坂東武士たる千葉氏の物語に加えた（取り込んだ）と考えています。その後、千葉氏の直系に代わって馬加千葉氏が千葉介を篡奪すると、馬加千葉氏を後見した原氏などが、藤原保昌を主人公とする「もう一つの酒呑童子物語」を創作したと考えています。お答えになっているかどうか、わかりませんが。

久保

要するに氏胤が都で生まれたこと、今おっしゃった現存逸翁本の祖本を参照し得る、複製本―少し語弊があるかも知れませんが―を生み出す環境の問題でしようか。その祖本に基づいて千葉氏なりの改変を加えた形で逸翁本を制作し得る「場」というのは、氏胤が生まれた京都、という理解でよろしいですか。

外山

ありがとうございます。やはり今までは、京都と「草深い坂東」とされてきた千葉、都と地方とが対立するものとして考えられてきましたが、今日のお二人の先生のお話を伺って、それが対立するものではなくて、お話にもありました交流ですね、結び付いている存在であり、都と地方を対立するものとして捉えるのではないという見方が提示されたのではないかと思います。

それでは、参加の皆さま方からいただいたご質問、もちろんたくさんいただいているのですが、お時間の関係で少ししかご紹介できませんが、二人の先生方にお伺いしてみたいと思います。

最初は久保先生にですが、「物語にはさまざまな文献がモデルとされ、酒天童子の物語に反映されていると話されていました。では物語制作当時の政治状況なども反映されていたりするのでしょうか。例えば酒天童子の首ですね。参考文献にもあった大路渡しは何をモデルに組み込まれているのでしょうか。」というご質問です。

久保

もちろん文学研究の一つの発想として、作品ができた当時の政治状況とか社会的な背景というのが作品（本文）に何らかの影響を及ぼしているであろうことは常に考えています。「大路渡し」の問題としては、合戦絵巻の『平治物語絵巻』がござります。『平治物語絵巻』の中に藤原信西の首が都にもたらされ、大路を渡される場面があります。京都の人々が牛車を止め、その首の行列を見物するという状況は―政治状況とは別ですが―、前提となる世相として考えてよいと思います。

むしろ『平治物語絵巻』で注目されるのは、「首」を渡している検非違使たちの存在です。検非違使というのは「都の警察」として、中・高校の社会科で教わると思いますが、消防の役割も果たしますし、こういった「災い」とか「犯罪」に関わるものは「穢れ」に関わる者ということになり、死した犯罪者の首を護送するという役割を担います。そうした人たちが行列を成し、「首」を捧げ、都の人々がそれを見物をしてい



るわけです。先ほど鈴木先生から「この大路渡しを見てはいけない」とありました。「見てはいけない」ということについては歴史史料で幾つもあり記載があります。例えば、後白河院という人は、見てはいけないのにああいったものを見るのが大好きで見に行く。『平家物語』の中でも平家の「首」が大路渡しされるのを見物しています。こういったことがある程度日常化した、やはり「源平合戦」とか南北朝を経て、『大江山絵詞』の「大路渡し」の場面があるのだらうと考えます。

外山 ありがとうございます。それではもう一つ、久保先生にご質問です。「源頼光は武士としての面では実際にはあまり見るべきものがないというように資料にもありましたが、後世の鬼退治物語においてヒーローとして取り上げられたのはなぜでしょうか。絵詞の作成された当時の理想の武士像に合致するものがあつたのでしょうか。あるいは作者のそれ以上の何らかの意図や思い入れがあつたと考えるのが自然でしょうか。」ということで、「実際とはかけ離れて物語のヒーローとなつていく頼光、その理由はなぜでしょうか」と、こういうご質問です。

久保 源頼光について論じられていらっしゃる方は歴史研究の方でも文学研究の方でも多いです。あと、小松和彦氏のように日本文化全般を考える方も。たとえば、頼光Ⅱライコウはやはりその名から「雷光」と音が通

じるので、名前から来るイメージからこうした存在として描かれるようになったと考えられる方もいらっしゃいます。私は今日『平家物語』の頼政又エ退治を紹介しましたが、この話はやはり虚構で、基本的に大内裏Ⅱ天皇を守る武士たちがその現場で活躍する話は歓迎されないと考えています。ただ、その職にある武士の強さを示す話が必要です。頼光は頼政に遡る源氏の系譜で同じ職掌にあるわけですから、むしろ「外」に出ていつて天皇を脅かす存在退治するという話が相応しかったと考えています。天皇を守る「兵」（つはもの）として、頼光にはいろいろなことが考えられると思います。現在の私の見方としては、やはり頼政のよいうな「後の時代」から遡って描かれているということです。源氏の系譜をさかのぼって氏族の物語を創り出していくような発想は、軍記物語の世界と重なります。軍記の登場人物はご先祖語り（戦場での名乗り）から自分を語り出しますので、同じ発想で一族を遡及したところにある頼光が物語の世界でどんどん大きくなっていく、という抽象的なことはお答えできるのですが、この程度でご勘弁いただきたいと思えます。

外山 ありがとうございます。では続きまして鈴木哲雄先生へのご質問です。『酒吞童子絵詞』が千葉氏の作だとすると、第9段ですね、唐人の話はなぜ組み込まれたのでしょうか。」というご質問ですが。

鈴木 ありがとうございます。私の話し方や拙著での記述がきつと悪いのですが、逸翁本『大江山絵詞』という絵巻物を千葉氏がオリジナルなものとして創作させたわけではありません。久保先生がお話しされたように、逸翁本には祖本（元本）があつて、それを一部変えて作り直したものが逸翁本であり、それが伝来しているわけです。ですので、逸翁本の制作過程で、唐人の話は千葉氏が入れさせたとは考えていません。また、唐人が中国に送られるという場面が一応、最後ということになっていますが、ほんとうに最後かどうか分からないのです。この部分

から先の絵巻物が欠落していますので。仮に一番最後だとしても、そのことが直接、千葉氏と関わるわけではありません。ただし千葉氏も含めて坂東武士の多くが、九州にも所領をもち、三浦氏が典型ですが、中国や朝鮮との、つまり唐人との交流に関わりを持っていたことは確実です。

外山

ありがとうございます。それでは鈴木先生にもう一つです。頼光（ライコウ）はもちろんそうですけど、その後、四天王もやはり独自にヒーロー化していきますが、そのことを受けてだと思いません。「渡辺綱が鬼の片腕を切り落とした」という伝説がありますけれども、これについてはいかがでしょうか。」という御質問が来ています。

鈴木

渡辺綱の鬼に関わる伝説ですね。綱が鬼の腕を切り落とすと、あとで取り返しに来たといった話ですね。もちろん、鬼とは何か、全体的な問題として議論しなくてはなりません。逸翁本の物語そのものには、綱による鬼の腕切りの話は直接には関わらないと思っております。

外山

ありがとうございます。あくまでも今日の『大江山絵詞』の話の枠組みの中の綱の存在ということに限定されたお話ということでご理解いただければと思います。

それではあつという間に時間がたってしまったのですが、今日の講座のいわば中心になるべき質問です。これもお二方に対して、そのものずばり『大江山絵詞』は千葉氏が作成し所有していた理由はなんでしょうか。」といただいております。今日のまとめということになるうかと思えますが、お二人の先生方からお話をいただきたいと思います。「大江山絵詞」を千葉氏が作り、所有していたその必要性、理由はなんでしょうか。」という、今日のまとめにふさわしいご質問かと思えます。

鈴木

一応、私が拙著に書いたことは、大須賀氏がたまたま持っていたのではなく、千葉氏の本宗家から預かったもので、南北朝時代の千葉介氏胤が、詞書の一部などを改変させて、制作させたものであったということですね。室町幕府の足利将軍は、三代義満の時代になると、たくさん絵巻など美術工芸品をコレクションするようになります。そのリストの中に、『大江山絵詞（酒天童子絵巻）』があってもよさそうですが、今のところないようです。しかし、京都生まれの氏胤は、將軍の足利尊氏や義詮、他の都人から逸翁本の祖本にあたるものを見せてもらえる機会があったのではないかと、そう考えています。あるいは、酒天童子物語の祖本を読む機会があり、頼光四天王の中の「平貞通」は、坂東平氏の祖の一人である「平忠道」のことなのではないかと、そう思ったのではないかと。そんなことを想像しています。

外山

久保先生、お願いします。

久保

今われわれが見ている逸翁本のみならず、この時代の絵巻物は非常に価値あるものです。千葉氏が逸翁本の祖本を、複製化あるいは複製されたものを入手したという前提でお話をするとこれは全く根拠がないのですが、この卷子本の形態―要するに巻物です―というのは、相当熟慮しない限り内容が理解できない。巻いてある長さ（分量）にもよりますけれども、現代のわれわれが冊子体の絵巻の複製をパラパラ見れば、一目瞭然で話の流れはわかりますが、巻かれているものを開いてその内容を十分に理解した上で入手するというのは、ちょっと考えにくいと思っております。この絵巻はこういうものである、という程度の理解。つまり頼光ら武士たちの活躍、酒天童子を倒す物語だ、という概略程度の理解で千葉氏が入手した。手元に入ってから、先ほどから鈴木先生がおっしゃられていた、「ちよつとこれは」という部分が出てきて、詞書が別に生み出されるという流れは考えられると思います。千葉氏が



入手したきつかけ自体は、大して中身を把握せず、絵巻物はそれだけで高価なもの、価値あるものですから、とりあえず入手したのではないのでしょうか。その後、自らの一族が伝え得るものとして改変を加えたのかもしれません。鈴木先生のおっしゃるように、千葉氏がかなりさかのぼった段階から持っていたというのであれば、以上のような経緯というか発想で考えています。巻子本の理解しにくさというのを前提に考え、自分の中でイメージしています。

外山 ありがとうございます。鈴木先生のお話の中で、香取本、つまり逸翁本が大須賀氏の女性から香取家に伝わったというお話がありました。もう一つ、先ほどからよく出ております、今サントリ美術館が所蔵しているサントリ本も小田原北条氏が作らせて、やはり落城の際に督姫という女性に伝わって、最終的に池田家に行くという、女性に伝わって伝来していくのですね。そういった意味で、私からの漠然とした質問になってしまおうのですが、こういった絵巻物、特に『大江山絵詞』のような絵巻物が女性に伝わっていくという点についてはどのように考えたらよろしいでしょうか。

久保 現存する奈良絵本の揃いとか、徳川家康が姪の満天姫に持たせた『関ヶ原合戦図屏風』が有名です。他家に嫁入りする娘に武勇を描く物語を持たせた「嫁入り本」に当たるわけですが、これはやはり強い武

士の子を産んでもらうというような発想で、「武士の物語」が娘たちに渡され、他家に嫁いだ慣習だろうと思います。いわゆる「嫁入り本」の問題ですので、酒天童子に限らないだろうと思います。

鈴木 中世の古文書などは、結構、女性、娘に預けるということがあったと思いますが、大須賀氏の場合、大須賀氏の娘がなぜ嫁入り道具として、逸翁本を含めて千葉氏の家宝類に威信財を香取大宮司家に持参したのか、ということについて余りいい考えがあるわけではありません。千葉氏や大須賀氏が滅亡する中で、妻と幼少の子どもが土着する。そして娘が成長し、嫁入り先として下総国一宮であった香取神宮の大宮司家を選ばれ、千葉氏の家宝類が嫁入り道具とされた。戦国時代までに、千葉氏一族の大須賀氏と香取神宮の中心的神官家の大宮司家や大禰宜家との姻戚的な関係がすでにあったのかもしれませんが。鎌倉時代以来、千葉氏一族の国分氏は「香取社地頭」でもありましたから。もちろん、広く女性が持つ財産権や家財に対する強固な占有権などについても考える必要がありますが、その点はまた別に考えたいと思います。

外山 ありがとうございます。それでは、お時間の関係で、残念ながら最後のご質問になってしまいました。逸翁本、つまり香取本にしても、あるいは千葉神社に伝わった『千学集抜粹』にある藤原保昌を主人公とした酒天童子説話にしても、千葉氏が酒天童子説話を受け入れている、それを伝えていたことは確かであると今日分かったと思うのですが、「千葉氏が酒天童子説話を受け入れた理由」ということについてはいかがお考えでしょうか。

久保 受け入れた理由ですか。

外山 受け入れて、伝えていった。

受け入れて、伝えていった。



久保

私の【資料12】『源平闘諍録』でも挙げましたように、皆さんがよくご存じの常胤の時代からは、源氏をサポートする一族で、千葉氏自体はトップにはならないわけです。常に何らかの強い勢力の側に付いていくわけですけど、逸翁本の保昌というのはそうした重要なサポート役であって、個人的には常胤に重なって見える部分があります。源氏の活躍する物語という点では、『源平闘諍録』も逸翁本『大江山絵詞』も同じですから。ただ、活躍する頼光をサポートする保昌に惹かれたわけではなく、先に述べましたように頼光が活躍する物語としてざっくりと受け入れられたのだと思います。あまり深い考えではないですけども。

外山

いかがでしょう。

鈴木

それについては、すでに述べたこと以上のことは答えられませんので、別のことを言います。北条氏綱が、一五五二年に後北条氏

本「酒伝童子絵」を制作させるわけですけど、狩野派の絵師に。その際、氏綱は家臣の大須賀氏が逸翁本『大江山絵詞』を所持していることを知っていたのでしょうか。知っていれば、奪い取ることができたのか？などと考えています。氏綱は結局、逸翁本とは別系列の後北条氏本「酒伝童子絵」を制作させるわけですが、その際の氏綱の意識には、坂東武士の統率者的なものがあり、それに関わって「酒伝童子退治物語」への思いがあったのではないかと考えます。



外山

ありがとうございます。今、後北条氏本、つまりサントリー本の話が出ましたけれども、これが作られる契機の一つとして、次のように考えられています。

私たちは小田原北条氏を「北条」といっていますが、氏綱の時までは「伊勢」と称していたのですね。それが関東支配の正当性を示すために「一三人の御家人」に出てくる鎌倉の北条氏にあやかって、「北条」と名乗るわけです。この北条への改姓とサントリー本の絵巻を作るのがほぼ同時期、それがリンクしているのではないかとこの説があります。私もそうなのかと思って納得しました。そういったことで、今日の講座を通して皆さま方に、もちろん武士としての力は武力が力の源ではあるのですが、むきだしの武力だけではなくて、こういったストーリーの力、あるいは美術の力、こういった文化の力をもって千葉氏の権力とか、権力の正当性、正しさとか、そういったものを示す役割があったということを、認識していただければ幸いです。武士というと、合戦とか権力の興亡ばかりになりがちですけども、千葉氏の持つ文化の力というところに目を向けていただければと思います。

司会不手際で時間を超過してしまいましたが、これにて閉じさせていただきます。お二人の先生方、ありがとうございました。今一度、先生方に拍手をお願いします。

芦田

先生方、ありがとうございました。それでは最後に本日共同開催となっております千葉市から、千葉市立郷土博物館、天野良介館長よりごあいさつ申し上げます。

閉会挨拶

天野 良介（千葉市立郷土博物館館長）

千葉市立郷土博物館の天野でございます。本日のお二方のご講演、及びクロストークをお楽しみいただきましたでしょうか。

千葉大学と千葉市との共催にて開催をさせていただきました。本日の開市民講座も本年度で6回目となりました。コロナウィルス感染症第8波も取り沙汰されるなかではございますが、これまでと同様、素晴らしい「けやき会館」を会場に開催させていただくことができました。これもひとえに千葉大学様の御理解とご配慮の賜物と、心よりの感謝申し上げる次第でございます。



また、今回貴重なご講演を賜りました、千葉大学大学院人文科学研究院・准教授 久保勇先生、都留文科大教授 久保勇先生、都留文科大教授 久保勇先生、開催にいたるまでの御準備をお進めくださった、大学事務局を始めといたします関係各位に、千葉市を代表いたしまして、改めて衷心よりの感謝を申し上げます。また、本館の第でございます。また、本館の外山信司 総括主任研究員が意

義深いクロストークを進行してくれました。ありがとうございました。

本年度は、都に災厄をもたらす鬼を退治する中世説話としての「酒呑童子」の物語を採り上げ、現存する最古の作品である『大江山絵詞』に何が描かれているのか。また、本作品が長く下総国一宮である香取神宮の大宮司家に伝来されてきたことから、その制作と伝来の過程についての検討を加えることを目指したところでございます。京の都とその周辺を舞台とする絵巻が、下総の地に伝来したのは何故か。そこには、東国武士、取り分け千葉一族がその制作過程に深く関わっていた可能性があることをご指摘いただきました。そのことは、東国武士を単なる地方勢力としてではなく、中央との関係においてとらえることの重要性に改めて目を向けさせていただく、貴重な機会となったものと存じます。本講座を通じて、千葉氏と房総の中世を新たな視野の下で御理解いただければ、開催の意義は達成されたものと存じます。

千葉市は、本年度を「政令市移行三〇周年」を記念する年度と位置付け、本館でもそれを冠とする展示会を開催して参りました。会期は明日で終了となりますが、特別展『我、將軍とならん―小弓公方足利義明と戦国期に千葉氏―』を開催中でございます。そして、四年後の令和八年（二〇一六）度には、千葉常胤の父常重が千葉市中心地に進出して街の礎を築いてから九〇〇年を迎える「千葉開府九〇〇年」と位置づけ、当該年度に向けて本館でも関連する展示会、および諸事業の展開を進めて参る所存でございます。本館の活動に、今後ともご注目をいただけますようお願い申し上げます。

結びに、地域史研究の今後の益々の発展、ご出席くださいました皆様のご健勝、そして、何よりもコロナウィルス感染症の一刻も早い終息を祈念いたしまして、言葉整いませんが結びのご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

令和4年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 講演録

酒天童子の物語と千葉氏
～逸翁本『大江山絵詞』をめぐって～

令和5年3月発行

発行 千葉市・千葉大学
編集 千葉市立郷土博物館
千葉市中央区亥鼻1-6-1
印刷 株式会社 世広

